冬うらら1.5

まるは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
冬うらら１．５

【Ｎコード】
Ｎ６２５２Ｕ

【作者名】
まるは

【あらすじ】
冬うららの続編　その後の二人です。【野いちご転載】

01／11 Tue. ―1

●

それは、一本の電話から始まった。

メイが、家の掃除をしている時のことだ。

更に正確に言うならば、９時ちょうどの出来事だった。

１月１１日。

結婚した翌日。

カイトは会社に出かけていて、この家にいるのは彼女ただ一人。

電話が鳴った時は、ドキリ、とした。

まだ全然、この状況に慣れていないのだ。

カイトと一緒に暮らす、というのはこれが初めてではない。

それ自体には免疫があった。

だからと言って、電話が得意なワケではないのだ。

彼の妻としての肩書きには――　まだ、ちっとも慣れていないのである。

結婚２日目という事実もあったが、それ以前に、お互い知らない

ことだらけのまま、すごい勢いで結婚してしまった。

時間がたてばたつほど、不安というものが押し寄せてくる。

もし、人に『あなたは、彼とどういう関係ですか？』と聞かれても、その事実をうまく伝えられる自信はちっともなかった。

しかし、電話が鳴っているからには、取らなければならない。

ハルコかもしれないし、もしかしたらカイトかもしれないのだ。

外から連絡をつける方法と言えば、この電話くらいしかないのだから。

ドキドキしながら、電話を取った。

相手もよっぽどの用事なのか、迷っている間中コールを鳴らし続けてくれたのである。

「もしもし…」

緊張する声で、電話を取った。

『ああ、よかった…！』

開口一番――　受話器は、安堵の声をあげたのだった。

※

ど、どうしよう。

メイは、鋼南電気の会社の前で、ウロウロしていた。

電話帳で住所を調べて、ようやくたどりついたのだ。

もうすぐ１２時。

ここに来る前に、いくつか寄り道をしてきた。

一つは、元のアパート。

戸締まりの確認と、貴重品や簡単な身の回りのものを引き上げてきた。

貴重品と言っても、カイトにもらったお金が入っている通帳くらいだ。

あとは化粧品と着替え関係をちょっと。

他にも持って帰りたいものがいくつかあった。

正式に、引き払いに来なければいけないだろう。

いつまでも、こうして放っておくワケにはいかないから。

部屋でいろんな感慨にふけっている場合ではなかった。

急ぐべき仕事が、残っていたのである。

アパートで、慌てて化粧だけすると出た。

本当は、カイトに電話を入れようと思ったのだ。

しかし、会社への電話というのは、トラウマが邪魔してできなかったのである。

メイが迷子になった時、彼女自身で一回。

派出所の巡査さんから一回、会社に電話を入れたのだ。

1ヶ月くらい前の出来事で、覚えている人はいないかもしれないが、やっぱりすごく怖くなって。

そうしているうちに、ここまでたどり着いてしまった。

ケイタイ番号を聞いておけば、こんな苦労なんかしなくてすんだのに、昨日も今日も、まだそれどころじゃなかった。

結婚生活に慣れようと努力をしている矢先に、ぎゅっと抱きしめられて。

抱きしめられると、頭が真っ白になってしまって、また一から慣れをやりなおさなければならないのだ。

あの不意打ちの抱擁がいけない。

あんなに接触好きな人だとは思わなかった。

そういえば――　最初に出会った時も、彼女は抱きしめられていた。

思い出すと、少し胸が痛い。

あんなところで働いていたという事実もだけれども、カイトが今までそんな風に女性に対していたのかと思うと。

いけない。

メイは、頭をプルプルと振った。

思いが通じただけでも信じられないのに、その翌日には結婚までしてしまって。

これ以上、何のゼイタクを考えているのか、と自分を叱咤した。

カイトが過去いろんな女性を抱きしめていたとしても、結婚相手は一人しか選べないのだ。

最後は、メイを選んでくれたのである。

やっぱり、信じられない事実なのだが。

だが、いまはそれどころではない。

大事件が起きてしまったのだ。

でなければ、わざわざ勤務中のカイトを訪ねてきたりはしない。

どうしよう。

胸の中にある言葉はそれだけ。

会社が終わって、帰ってくるのを待つ方がいいのだろうか。

普通に考えれば、そっちの方がいいはずだ。

しかし、内容が内容だった。

何度も何度も、ビルの前をうろうろした。

カイトが偶然出てくる――　なんてことはなかった。

やっぱり。

メイは、くるりとビルに背中を向けた。

やっぱり、いきなり訪ねるのは失礼だと思ったのだ。

カイトだって恥ずかしい思いをするに違いない、と。

そして。

勇気を出して、公衆電話の受話器を取ったのだ。

※

代表電話。

やはり、電話帳にはそれしか載っていなかった。

喉から心臓を飛び出させんばかりに緊張しながら、ゆっくりとその数字を押す。

一つ押すごとに、受話器を元に戻したい衝動を抑えなければならなかった。

何て言おう。

この場合、頭の中に巡るのは、カイトにどういう風に言おう、ということではなく、その前に立ちふさがる受付とかを、どうやってクリアしようかということだった。

失敗した記憶ばかりがよみがえってしまう。

1コールの後。

『はい、鋼南電気でございます』

受付嬢が出てしまった。

「あっ…あのっ、私、家のものなんですが…カ…社長はいらっしゃいますか」

慌てる唇で、彼女は何とかそれを言い終えることが出来た。

考えてみれば、文法はめちゃくちゃである。

家族のものが、『社長、いらっしゃいますでしょうか』などという発言を、するはずがないというのに。

受話器の向こうに、一瞬沈黙があった。

『……少々お待ちくださいませ』

電話は、保留音になった。

ほぉ、とため息をつく。

とりあえず、お城の門番に門を開けてもらえた気分だったのだ。

ため息をついた直後。

すぐに保留音は途切れた。

『お電話代わりました、秘書室です』

電話の声はカイトではない。女性のものだった。

また、いま門番に言った言葉を使わなければならないのだ。

しかも、今度は前よりも強固な門番――　とは失礼か。

親衛隊が、お相手なのである。

ここを通らなければ、王様に謁見することは出来ないのだ。

家のものですが。

メイは、自分の鼓動にかき消されないように、頑張ってそれを言ったのだ。

『…失礼ですが、社長とはどのようなご関係でいらっしゃいますか

？』

ああ。

目の前が真っ暗になった。

ついにそれを聞かれてしまったのだ。

答えなければ先に進めないのである。

本当に家族のものなら、ここでためらったりするはずなどないのだ。

母にしろ、姉にしろ妹にしろ、はっきりそう言えるのである。

そう言えば、向こうはすぐ『申し訳ありませんでした、しばらくお待ちください』と言って、王に会うための扉を開いてくれるだろう。

妻と。

いまのメイは、はっきりとそれを言うことが出来なかった。

しかし、言わなければ、電話はここで終わりである。

冷たい汗が背中を流れた。

唇が震える。

「あ…あの……つ……妻です」

ご、ごめんなさい！！！

メイは、見えないカイトに向かって、精一杯謝ったのだった。

01／11　Tue.　―2

□

山積みの書類。

カイトは、社長室に軟禁状態だった。

いままでその仕事をサボリにサボっていたツケが、ここで回ってきたのである。

シュウは、まったくもって容赦なかった。

しかし、強い反撃が出来ない。

ぶっ倒れて入院はするわ、退院してもデスクワークを嫌い、開発室ばかりに入り浸るわ、の生活だったのだから。

いざ幸せになった途端、副社長は当然の仕事とばかりに、うず高い書類を机に積んでいってくれたのだった。

くそっ。

まだ、開発室ならよかった。

そうであれば、仕事にトランス入ることが出来るのだ。

はっと気づけば、もう定時という時間にだってなる。

しかし、社長室で書類仕事では、集中できやしない。

メイが。

彼女が、頭にこびりついて離れないのである。

昨日、結婚したばかりなのだ。

本当に家に帰ったら、メイが扉の向こうにいるということさえ信じられない状態なのである。

それを確かめたくてしょうがないのに、時計はまだ昼の１２時になろうとしているところだった。

今日という時間が、半分しか終わっていないのだ。

その上、就業時間というのは、午後の方が長いのである。

書類をめくっては、数分おきにイライラしながら時計を見てしまう。

そんな時。

机の上の電話が、プツッという接続の音を告げた。

『社長、いまよろしいでしょうか？』

秘書の声だ。

電話か来客かあったのだろうか。

「何だ」

ボールペンを持ったまま、書類にチェックを入れる手を休めずに、カイトは短く返答した。

『あの…つかぬことを伺ってよろしいでしょうか』

言葉に、ようやく彼は手を止めた。

秘書にしては、珍しく戸惑った声でそんなことを伝えてきたせいだ。

電話を見つめるが、いまの彼女の表情を教えてはくれなかった。

『その…失礼なことかもしれませんが、社長…社長は、ご結婚されていましたか？』

あぁ？？

心臓が――　止まるかと思った。

何故、秘書がそんなことを知っているのか。

シュウがしゃべるはずがない。

ハルコか。

そんな疑惑が、胸をついた。

彼女は、この会社の秘書だったのだ。

それに、いまの秘書を推薦したのも彼女なのである。

何らかの交流があってもおかしくなかった。

ムカムカ。

結婚という事実を人に知られたのが、無用に腹立たしい。

秘密にしたいというワケではない。

しかし、興味半分でつつかれるのだけはごめんだった。

「仕事とは関係ねぇだろ」

棘の含まれる声で、カイトは怒りを伝えた。

この件については、触れられたくなかったのだ。

秘書にわざわざ教える必要もなかった。

女はおしゃべりなのだ。

一人に知られたら、会社中に広まること間違いナシである。

『そう…ですか。いえ…いま、社長の奥さんとおっしゃる方からお電話が入ってまして…ちょっとご確認が必要かと思いまして』

なにぃー！！！？？？

心臓が吹っ飛びそうな発言だった。

カイトの奥さんなんて、この世にたった一人だ。
メイ以外の何者でもない。
どうして、彼女が会社に電話を。
そういえば、ケイタイ番号を教えていなかった。
何かあったら、会社の代表電話に電話するしかないだろう。
仕事中に電話をしてくるほどの大事が起きたのか。
カイトは目を白黒させたまま、パニックに陥っていた。
いろんな予測が、勝手に頭の中を走り抜けるのである。
『何か切羽詰まったようは声の女性でしたが…では、会議中とでもお伝えてして、お切りしましょうか？』
現実は進む。
秘書は、気を利かせてそんなことを言った。
バカ野郎！
「つなげ！」
それこそカイトの方が、切羽詰まった声になりながら、電話に向かって怒鳴った。

もう、書類もボールペンも放り出している。

『は？』

怪訝な秘書の声。

「いいから、つなげっつんだ！！！」

※

『ごめんなさい…お仕事中に』

電話は――　間違いなく、メイの声だった。

うっかり妙な返事をして、電話を切られずに済んでよかったと、心底カイトはほっとした。

しかし、心配はまだ山積みだ。

電話の理由を、確認していなからである。

すごく不安そうな声と、悪そうに謝る声が胸を締め付ける。

公衆電話らしい。

受話器の向こうから、車が走り抜けるような音がいくつも拾えた。

外に出ているのだろう。

一体、何が起きたのか。

言いづらそうに、続きを切り出さない彼女のおかげで、カイトは自分の首を絞め続けるのだ。

まさか、道に迷ったのか！？

過去の恐ろしい記憶が、プレイバックする。

彼女を失うかもしれないという恐怖に、心臓を掴まれたあの日のことが、鮮やかによみがえってしまうのだ。

同時に、別の予想も頭を持ち上げる。

やっぱり結婚には自信がなくなった、とか言い出すのではないだろうかと。

いきなり足元に火をつけられてしまったような、焦りと苛立ちに取り巻かれる。

「いまどこだ？」

そんな不安を悟られないようにするのが、精一杯の声にしかならない。

この、こみ上げてくる気持ちは、電話の声では払拭されないのだ。

『あ、あの…いま、実は会社の近くにいるんです…その、お昼休み…時間、ありますか？』

遠慮がちな、そんな声を聞いた瞬間。

ガタン！　バタッ！　ダダダッッッ！！！！！

カイトは。

受話器を投げ捨てて、社長室を飛び出していた。

01／11 Tue. ―3

○

この声。

社長秘書――リエは、受付から回ってきた電話の声を聞いた瞬間、記憶を甦らせた。

自慢ではないが、彼女は非常に記憶力がよかった。

特に、仕事に関した出来事については、ムキになって覚えるような習慣がついてしまっている。

それもこれも、ボスである社長の性格のおかげだ。

ボスの名前をカイト、という。

彼は、開発の仕事の才能は凄い――　らしい。

らしい、としか表現できないのは、リエ自身はテレビゲームなどはやらないからだ。

本体さえも、自宅には置いていない。

社長が開発に関わったソフトが、どんどん売上を伸ばしていることを彼女は知っている。

経営面の手伝いをすることはないが、業績のチェックだけは、怠らなかった。

それらを考えると、社長という存在は、この会社を高みに押し上

げられるだけの力を持った人間、と考えて間違いない。

しかし。

リエは、社長に好意は抱いていなかった。

仕事が出来ようが、開発の社員に尊敬されていようが、ちっともカイトのことを尊敬できなかったのである。

それどころか、『何…この人、信じられないわ』、と思うことしばしばだった。

メインとなる社長としての仕事は、かなりぞんざいな態度だ。

ネクタイが嫌い、書類仕事が嫌い、接待が嫌い。

社長は、嫌いなものがたくさんあり、気分屋で、気に入らないことがあると、あからさまに表情に出すのである。

特に、その嫌いなものについてリエが何らかの失敗をしようものなら、おまえは無能だ、とでも言わんばかりの態度を取られるのだ。

こんなに腹立たしいことはない。

これでよく、社長としての立場が務まるものだと思うが、それでも取引などは成功させていた――　が、取引先に好かれているようには感じなかったので、かなり強引な取引を行っているのだろう。

おかげでリエは、社長の開発以外の雑務については、慎重になるように出来上がってしまったのだ。

管理職としての処理能力では、副社長の方が余程仕事が速く、正確で、不機嫌な態度を取られることもなかった。

とりあえず今のリエは、この社長宛の電話を処理しなければならなかった。

現在、書類作業中ということもあるので、迂闊な電話を取り次ぐと、またとばっちりが来かねないのだ。

電話の声は、女性だった。

去年の年末くらいに、同じような内容がかかってきたことを思い出す。

大体。

これまで、社長宛に『家のもの』という名で電話があったのは、過去1回だけである。

だからこそ、記憶が鮮明に残っていたのだ。

しかも、妙な内容の電話だったのである。

家のものだという割には、社長自宅の電話番号を知らなくて、事もあろうにリエにそれを聞こうしたのだ。

勿論、自宅の電話番号もケイタイの番号も知っている。

しかし、それを誰かも分からないような相手に教えるハズがなかった。

その妙な電話が、再びやってきたのである。

「…失礼ですが、社長とはどのようなご関係でいらっしゃいますか？」

記憶のせいで、リエはそのまま社長に電話をつながなかった。

もしも、これが不審な電話であるというならば、書類作業というナーバスな仕事をしている社長に、爆発の火種を放り込むことにもなりかねない。

その不機嫌の矛先が、一番近い自分に向く可能性だって高いのだ。

本当に家族関係者であれば、ここでためらわずに返事があるはずだった。

しかし。

電話の向こうはためらいを見せた。

これは。

どう考えても、不審以外の何者でもない。

適当に話をはぐらかして電話を切ろう、と思いかけた時、リエは信じられない返事を聞いてしまったのである。

『あ…あの……つ……妻です』

は？？？？

自慢するわけではないが、リエは動揺したり取り乱したりすることが少ない女性だった。

いつも、出来るだけ冷静に考えて判断しようと努めていたのだ。

しかし。

これには、驚いた。

この電話は、妙というどころではなかったのだ。

あの社長の。

妻――　いわゆる、奥方と名乗る相手からの電話だったのだ。

社長が既婚者であるというのを聞いたことは、一度もなかった。

彼は親元を離れて、一人暮らし。

いや、副社長と2人で生活をしているのは知っていた。

まだ、姉とか妹とか言われたら、すんなり納得しただろう。

社長のプライベートを、そこまで知っているワケはないのだから。

しかし、妻となると話は別だ。

社員の誰が、既婚者であるか未婚者であるかというのは、普通は周知の事実だ。

特に社長となると、リエが一番側にいる仕事相手である。

それを知らなかったという事実に、珍しくパニックに陥ってしまったのだ。

と、とりあえず。

社長に確認を取るのが、一番いいと思った。

たとえ、この電話が頭のおかしな人からの悪戯電話であって、社長から『ふざけるな！』と怒鳴られようとも、大事を取って確認する必要があった。

普通なら、ありえないと思うだろう。

会社を統べる社長が結婚したとなると、いろんな取引先などを呼んで、大々的な結婚式などを開くものではないだろうか。

会社でも、噂が広まるのではないだろうか。

リエは電話の相手に待つように伝えると、社長室への内線を開いたのである。

あの社長、だったからだ。

彼とプライベートなことは、一切話したことがない。

仕事以外で、まっとうなコミュニケーションを取ったことがない

のである。

いつも、相手からの一方的な言葉を投げつけられるだけだった。

社長が本当は何を考えて生きているのか、ちっとも理解できない。

ワンマンで、強引で、粗暴で、それから――　いや、いまはそういう話ではなかった。

とにかくそんな、内側をよく知らない相手だからこそ、一般的に考えたら突拍子もない出来事でも、『もしかしたら』という疑惑になるのだ。

ブツッ。

社長室と通じた音がする。

呼びかけると、やはり不機嫌な反応が返ってくる。

「その…失礼なことかもしれませんが、社長…社長は、ご結婚なされていましたか？」

しばらくの沈黙の後に、相手から帰ってきた答えは。

『仕事とは関係ねぇだろ』、というものだった。

リエは、言葉にちょっと引っかかった。

否定でも肯定でもなかったのだ。

しかし、いま忙しいという波動がはっきりと伝わってきて、そん

な話題に付き合うのはお断りのようだった。

彼女としても、これ以上話題を続けるのは得策ではない。

「そう…ですか。いえ…いま、社長の奥さんとおっしゃる方からお電話が入ってまして…ちょっとご確認が必要かと思いまして」

ただし、わざわざそんなくだらないことを確認するためだけに、内線を開いたのかと思われたくなかったので、簡単に事情を説明する。

噂好きの女性社員と、ひとくくりにされたくなかったのだ。

これで説明は終わりだ。

「何か切羽詰まったようは声の女性でしたが…では、会議中とでも伝えてお切りしましょうか？」

もう、リエは電話を切るつもりでそう言った。

一応、確認の形は取っているが、どうせ社長からの返事は『勝手にしろ』とか、そういうものに決まっているのだから。

受話器を軽く耳から離しかける。

あと一言くらい言葉を言って、電話を切ろうと思っていたのだ。

『つなげ！』

聞き違いかと思った。

「は？」

慌てて、リエは受話器を耳にきちんと戻した。

ちょっと離していたために、音を拾いそこなったのかと思ったのだ。

「いいから、つなげっつんだ！！！」

何ですって？？？？

リエは――　信じられなかった。

しかも、話はここで終わりではない。

呆然としたまま、電話を切り替えてしばらくした後。

バタン！

大きな音と共に、社長室のドアが開いたのだ。

中から、社長が物凄い顔で飛び出してくる。

「あの…」

どちらへ。

最後まで聞くことは出来なかった。

社長は、あっという間に彼女の目の前を走り抜けて、秘書室を出てすぐのエレベーターに向かうのだ。

ドアは開け放されたままなので、その動きがはっきりと彼女から見えた。

あっけに取られてその背中を見ていると、彼はエレベーターが途中階にあるのに気づいたようで。

何と。

階段の方に駆けて行ったのである。

ここは、7階だった。

い…。

リエは、何度も何度もまばたきをした。

いまのは……何なの？

あなたの知らない世界――　だった。

01／11 Tue. ―4

●

ガチャーン。

受話器の向こうで、大きな音がした。

メイは、その激しく乱暴な音に、思わず受話器を耳から離してしまう。

しかし、すぐにまた耳に戻した。

「ど、どうしたの！？」

慌てて電話の向こうに話しかけるが、反応はまったくない。

回線自体は切れてはいないようだ。

切れているなら、ツーツーという音がするはずなのだから。

ということは、受話器は浮いたまま、ということである。

ただごとではない予感がして、不安が胸を刺す。

もしかしたら、具合が悪くなって倒れでもしたのではないかと、オロオロしてしまった。

何度か話しかけたけれども、やはり何の反応もない。

どうしよう！

受話器を持ったまま、キョロキョロする。

同時に、誰か助けてくれそうな人を探そうとしているバカな自分に気づいた。

ここで倒れているワケではないのだから、助けてもらいようがない。

メイは電話を切ると、鋼南電気のビルに向かって駆け出した。

社員なら、事情が分かるかもしれないと思ったのである。

さっきまで、どうあっても入れそうになかったビルの自動ドアの内側に、彼女は入り込んだのだ。

「いらっしゃいませ」

すると。

いきなり、カウンターの中の受付嬢が頭を下げるではないか。

「あ、あの…！」

どう伝えていいか分からないが、とにかく心配が先に立っている彼女は、何とかさっきの電話で起きた出来事を言葉にしようとした。

言葉を口にしようとした瞬間。

ダダダダダッッ！！！！

物凄い音が、端の方から聞こえてきたのである。

振り返ると、そっちには階段があって。

誰かが――　駆け下りてきたのが見えた。

ひるがえる、ネクタイの先。

誰かって。

メイは目を見開いた。

階段を駆け下りた存在と、しっかり目が合ったのである。

一瞬、お互い完全に動きを止めてしまった。

チン！

しかし、二人の間にあるエレベーターの扉が開いて、数人の社員らしき背広姿の人たちが降りてくる。

その人たちの姿で、向こう側にいた彼が見えなくなった。

よかった。

メイは、その遮断のおかげで、ようやく我に返ることが出来たの

だ。

そして、強い安堵を覚えた。

彼は、倒れたワケではなかったのだ。

あの電話については、どういう事故が起きたか分からないけれども、カイト自身は全然元気そうだった。

でなければ、階段を駆け下りて来たりはしな――　え？

メイは、真っ赤になってしまった。

すごく、変な翻訳が頭の中に現れたからである。

何でエレベーターがあるのに、階段で駆け下りてきたのだろうかという疑問に、勝手に答えを出してしまったからだ。

ブンブンとその翻訳を振り払った。

ここ数日、本当に翻訳が自分に都合がよいものばかりで、逆に落とし穴のような気がしてしょうがないのだ。

うっかり自惚れてしまいそうになる。

そうなったら、即座に転んで痛い目を見てしまいそうな予感があった。

そんな風に、彼女がいろんな思考にまとわりつかれたり、振り払ったりしている時。

「あの…お客様？」

後ろから声をかけられた。

メイは、すっかり受付嬢のことを忘れ切ってしまっていたのだ。

いきなり飛び込んできた客が、用件も言わずに相手をシカトしていたのである。

不審に思われないハズがない。

「あ、すみません…あの…」

メイは、慌てて受付嬢の方に向き直った。

しかし、これから何をどう説明すればいいのだろうか。

カイトに何かあったかも、ということに関しては、まったくの事実無根であることが、いま証明されてしまったのだ。

だからと言って、今更、『社長はいらっしゃいますでしょうか？』なんてことを聞くのも妙である。

だが、このまま放置していくワケにもいかず。

とにかく、取り繕ろえる言葉を探そうとしていた。

なのに。

「あら？」

カウンターの内側の女性が、不思議そうな声を出した。

え？

受付嬢の視線が、メイ自身を飛び越えていることに気づいて、後ろを振り返ろうとする。

「社長…？」

その声が、カウンターから聞こえてきた瞬間。

「きゃっ！」

メイは、悲鳴をあげてしまった。

いきなり強い力が、むんずと彼女の腕を捕まえて引っ張ったからである。

転びそうになりながら、何とか体勢を立て直す。

やっと、視線を前に固定することが出来た。

そのまま、彼に引っ張られ続ける。

あ。

背中だ。

忘れようもない。

今朝、会社に見送った背中と同じものだった。

階段を駆け下りたせいか、その肩には前の方から回ってしまったネクタイのシッポが見えている。

カイトだ。

間違いない。

「あ、あの…ごめんなさい。勝手にきちゃって…」

背中に向かって、メイは一生懸命言い訳をしようとした。

決して、仕事の邪魔をしたかったワケではないのだ。

それだけは、ちゃんと彼に伝えたかった。

結婚した途端、毎日こんなことをするような女だと思われたくなったのである。

本当に、今日は特別な用事で来たのだと。

しかし、彼の背中は何も聞いちゃくれない。

さっき1階に来たままだったエレベーターに乗せられる。

イラついたような動きで、カイトは4階のボタンを押した。

小箱の中で二人きりだ。

カイトは、扉の方に顔を向けたままで黙っているので、いまどん

な気持ちなのか、全然分からなかった。

どこに連れて行かれるのかも。

声をかけそびれている内に、エレベーターは3階で止まった。

彼が指定した階は4階だったハズである。

なのに、3階で止まるということは――　誰かが乗ってくる、ということだ。

カイトもそれに気づいたのだろうか。

はっと、身体が動いたのが分かった。

扉が開く。

「だからさぁ…そこの…」

そんな声が、開いた扉の向こうから聞こえてきた。

「でもよ…って、あ！　社長！」

乗ろうとしていたのは、男性社員2人。

入り口のところに立ちふさがるカイトを見つけるなり、声音が変わった。

本当に、彼は社長なのだ。

さっきの受付嬢の言葉もそうだし、今度もそうだ。

この会社の、一番上に座っている人なのである。

鋼南電気の会社社長としてのカイトに会ったのは、今日が初めてで。

だから、そんな風な現実を見ると、いままで分かっていたかのように思えて、実は自分が彼の立場というものを、全然分かっていなかったような気がした。

「次のに乗れ」

カイトが、社員に向かって言った言葉はそれだけで。

言うなり、彼の指が「閉」のボタンを押したのが分かった。

バタン。

相手の反応を見るまでもなく、再びエレベーターの扉は閉ざされた。

ああ。

メイは、この会社に来てしまったことを、激しく後悔した。

誰だって、恥ずかしいに決まっているではないか。

社長が女と一緒に会社内にいた、という事実だけでも、どんな噂が立てられるか分からないのに。

あの受付嬢には見られてしまったワケだから、もうその噂は止められないかもしれない。

これが、仕事場でなければ別にかまわないだろう。

二人の関係は、あくまでプライベートなことなのだから。

けれども、ここは職場なのだ。

勤務中に女性と会っていた――　かなり、聞こえが悪い。

ごめんなさい。

一回心の中で謝るのが精一杯だった。

エレベーターは、すぐに４階についてしまったのだから。

01／11 Tue. ―5

□

階段を駆け下りた。

途中の階で、エレベーターが止まっていたせいである。

この階まで上がってくるのを、待ってなんかいられなかったのだ。

何で。

駆け下りながら、カイトは頭の中に疑問を飛び交わせた。

何で、わざわざ会社まで訪ねてきたのか。

それは、イヤだ、ということではない。

そうではないのだ。

そうではなくて、その理由をどんなに考えても、ばっちりはまるパズルピースが見つからないのである。

あのメイが――　そんなに長い付き合いをしたワケではないが、とにかくあの彼女が、くだらない理由でわざわざ電話してきたり、会社に訪ねてきたりするとは思えないのだ。

何か困ったことでも起きたのか。

そう思うと、もう本当にいてもたってもいられずに、階段途中か

ら踊り場まで一気に飛び降りる。

ダダダダッ！

ようやく、一階まで駆け下りた。

ゼイゼイと切れる息もそのままに、また走り出そうとした。

さっきの電話の感じからすると、きっとこのビルの外にいるのだ。

が。

動きに急ブレーキをかける。

上げた視線の中に、誰かがぱっと飛び込んで来たのだ。

受付カウンターの前。

そこから振り返るように、カイトの方を見ている存在が。

間違いない。

メイだ。

※

まさか、ビルの中で彼女と出会えるとは思ってもみなかったので、

一瞬呆然としてしまった。

そこに、忌々しくもエレベーターが到着する。

２人の間に、一瞬人間の壁が出来たのだ。

クソッ。

その人波を横切って、受付の方に歩き出す。

視界が開けた途端、あの茶色の目はなかった。

違う。

受付の方を向いて、何か話しているようだった。

だから、カイトから見えているのは、その背中だけだったのである。

ズカズカとそっちの方に近寄っていく。

メイが。

胸が、バスドラムのように深くて速い音を立てる。

メイが――　そこにいるのだ。

その事実すら、カイトはまだ信じられずにいるのである。

向こうを向いている彼女の腕を、ぐっと掴んだ。

受付の女よりも、メイは自分に用があって来たはずなのである。

だから、そっちを向いている必要などない。

そのまま、強く引っ張った。

そんな風に、メイへの独占欲が炸裂してはいるものの、内心ではかなりまだ気が動転している。

どこか、ゆっくり話ができそうな場所。

そして、誰もこない場所が必要だった。

引っ張っている時に、後ろから彼女が何か言っているような気がしたが、いまの精神状態では、はっきり聞き取ることが出来なかった。

こんな落ち着かない公共の空間で、彼女を他の誰かに見られるのもイヤだったのだ。

カイトは、慌てて会社内で検索をかける。

冷静に考えれば会社の外でもよかったのだろうが、この時の彼は、それを思いつけなかったのだ。

か、会議室！

頭の中に電球が光ったワケではないが、閃いたその言葉に向かって彼は歩いた。

会議室は４階にあるのだ。

エレベーターは、幸いさっき到着したヤツが、まだとどまっている。

メイを引っ張ったまま、エレベーターに飛び乗った。

バタン。

ドアが閉まって。

４階のボタンのランプだけが点灯している、狭い箱の中。

２人キリになった。

本当に。

いま後ろにいるのは、メイだろうか。

そんな不安がよぎって、カイトは振り返れなかった。

あの時。

一瞬、人波で彼女の姿が消えた。

次に見たのは後ろ姿で、そのまま顔も見ずにここまで引っ張ってきてしまった。

もし振り返って、そこにメイがいなかったら。

何てことを考えるのか、この頭は。

カイトは、いま自分の考えたことを、首ごとちょんぎって投げ捨てたくなった。

いるに決まっているではないか、と。

もう、何も不安に思うことなどないのだ。

彼らは結婚したのだ。

夫婦なのだ。

その言葉のロープを、カイトはがっちり握りしめた。

そして、勇気を振り絞って身体をひねろうと思ったのだ。彼女の方に。

なのに、エレベーターは3階で止まってしまった。

ムッ！

カイトは、自分の短気の尾が、引きちぎれそうになったのが分かった。

誰かが――　おそらく社員が、このエレベーターで上を目指そうと言うのである。

「だからさぁ…そこの…」

「でもよ…って、あ！　社長！」

予想通り社員が2人、目の前に現れた。

開発室の連中で、見覚えのある顔だ。

くんじゃねぇ！

ドアの真ん前に立ったまま、カイトは、慌てる2人に感情を抑えずに言った。

「次のに乗れ」

すかさず、扉を閉める。

驚いた2人は、カイトが邪魔でエレベーターの奥の存在には気づけなかっただろう。

それが、最後のハプニングだった。

ようやく、2人は4階の会議室にたどりつくことができたのだ。

※

会議室は、案の定無人だった。

カイトは入るなりドアを閉ざし、カギまで閉めた。

うっかり、誰も入って来られないように、だ。

それから、やっとゆっくりと彼女を、視界に入れることに成功したのだ。

この環境が出来るまでは、まったく落ち着かなかった――　いや、いまでも全然落ちついてなんかいない。

一体、何があった。

見えない不安の霧がある。

それを感じたカイトは、つい眉を顰めてしまった。

きっと、その顔がいけなかったのだ。

「ご、ごめんなさい！　勝手に会社まで来ちゃって！」

怒られると思ったのだろうか。

彼女は心配そうな顔で、慌てて頭をさげたのだ。

んなこた、どうでも…

「…いい」

口から出たのは、最後の2文字だけだった。

本当は、気にするなとか言ってやりたいのだ。

別にカイトは怒っているワケではないのだから、それをうまく伝えてやりたいのに、このザマだ。

「ホントは、帰ってくるまで待とうかとも思ったんだけど…でも、

どうしたらいいか分からなくて…だから、その…」

メイは、つっかえひっかえに言葉を出すが、全然要領を得ない。

早く用件を教えてくれないと、カイトの方が不安で圧死しそうだ。

一体何が、メイにこういう行動を取らせたのか。

やきもきしながら、とにかく言葉を待つ。

気をつけないと、うっかり「早く言え！」と怒鳴りそうだ。

それをぐっとこらえる。

彼女を余計に怖がらせるだけだし、きっと自分自身も自己嫌悪に陥ること間違いナシだ。

「あ、あのね…」

ばさばさ。

彼女は、持ってきたバッグの口を開けて中を探る。

そうして茶封筒を出した。

更に落ち着かない手で、封をしていない茶封筒の口を開けて、中身を取り出す。

白い紙。

ペラペラの。

「あのね…これ……」

差し出されたので、反射的にカイトは受け取ってしまった。

見覚えのあるものだった。

こ。

ん。

い。

こんい……　――　婚姻届ーーっっ？？？

まさしく、昨日提出したばかりの用紙だ。

中に書いてある文字も、全部見覚えがあった。

何故、こんなものが、いまここにあるのか。

何故、メイが持っているのか。

何故？？？？

メイが、どうしたらいいのか分からない戸惑ったままの唇で言った。

「あ、あの…それ……記入不備で…受理されてなかったの」

カッチン！

カイトの時が。

凍った。

01／11 Tue. ―6

●

カイトが驚いている。

その事実と表情がつい珍しくて、メイは彼の顔をじっと見てしまった。

いつも不機嫌そうな顔ばかりしているので、そうでない表情を見ることが少ないせいだ。

だから、現状も忘れて見入ってしまったのである。

「あ…」

カイトの口から、信じられないような声がぽろっと一つこぼれ落ちて、そこでようやく彼女は我に返った。

「あのね…あの、私の記入漏れのところは直したの。あと、ここのところをカイトに埋めてもらったら、大丈夫らしいんだけど」

ボールペンを取り出しながら、彼女は早くその作業を終えてもらおうと思った。

カイトの仕事の邪魔にならないように、用事が済んだらすぐに出ていく気だったのである。

具体的なやるべきことを呈示されたせいか、カイトはハッと目に力を取り戻した。

彼女からボールペンを受け取ると、会議室の机の上で、立ったまま記入し始めてくれたのだ。

その横顔を。

ついつい、また見入ってしまった。

この人と、結婚したとばかり思っていた。

そう信じて疑っていなかった。

しかし、現実は違ったのだ。

まだ、彼らは他人のままで、昨日の出来事は『同棲』という言葉にすぎないのだ。

だから余計に、今日の電話で『妻』という単語を使っていいのかどうか迷ったのである。

自分がまだ、そういう立場ではないことが分かっていたので。

でも、もしもこの用紙を提出しないなんてことがあったら――

怖い考えを、思わずメイは振り払った。

そんなことはあるはずないのだ。

カイトは、自分を好きだと言ってくれて、彼が婚姻届も取ってきて、役所まで連れて行ってくれたのだ。

その彼が、いま記入してくれているカイトが、もう一度その用紙を提出するのを拒むハズはないのである。

その理屈だけをぎゅっと握りしめて、メイはじっと見ていた。

書き終わったのか、用紙を掴んだ彼が顔を上げる。

視線が、メイの方を見た。

「あ、それじゃあ…私、それ出しに行くから」

彼女は、手を差し出す。

これで用事は終わりなのだ。

「……」

しかし、カイトはためらうような態度を見せた。

用紙を渡しかけたのだが、その動きを止めてしまったのだ。

え？

メイは、指先が一瞬冷たくなった。

まさか――　な、態度だったのである。

まさか、その用紙を再提出するということに、カイトは何か思うところがあるのだろうか。

後悔してしまったの？

そんな言葉が、冷たくなった指先から、爪の間から入り込んでくる。

カイトは。

彼は、最初ゆっくりと動いた。

「来い…」

腕を捕まれた。

引っ張られる。

一体――　どこに連れて行こうと言うのか。

※

役所だった。

メイは、盛大に拍子抜けしてしまう。

ずっと助手席で不安だったのだ。どこに連れて行かれるのか。

彼があんな態度を取ったおかげで、生きた心地がしなかったのである。

頭の中に、怖い想像ばかりが駆けめぐって、何を言われるのかビクビクしてしまっていた。

なのに到着した先は、今日メイが記入不備の書類を受け取ってきた役所だったのである。

驚いて運転席を見る。

エンジンを止めたカイトも、彼女の方を見た。

しかし、すぐにその顔は、ぷいとそらされる。

カイトは、顔をそらしたまま、無言で車を降りてしまった。

そのまま置き去りにされるのかと思いきや、助手席のドアがガンと開けられて。

メイもそこから引きずり出される。

そして――　役所の建物の中に連れて行かれるのだ。

あ。

そこで、メイはようやく翻訳ソフトが動いたのが分かった。

もしかして、と。

もしかして、カイトは彼女一人に任せておけないと思ったのだろうか、と。

だから、一緒に連れて来てくれたのだろうか。

無言で自動ドアの内側に入ると、暖房がよく効いていて暖かい。

しかし、その温度差にほっとしている暇はなかった。

彼は、そのままカウンターへ向かったのである。

「あぁ…あなた方ですか」

すぐに――　発見されてしまった。

昨日、婚姻届の面倒を見てくれた職員の人が、二人を見つけるなりカウンターまで近づいてきてくれたのだ。

「いやぁ、昨日何度かお電話を差し上げたんですが、ご不在のようで心配していたんですよ。わざわざご足労、ありがとうございました」

記入不備の書類を押しつけられたというのに、あんなに昨日のカイトの態度はメチャクチャだったというのに、この職員は非常に物腰柔らかく応対してくれる。

メイが、用紙を受け取りにきた時もそうだった。

ヤマダさん、というらしい。

電話で、彼はそう名乗ったのだ。

カイトは、そのヤマダという職員に、不作法な手つきで書類を突き出した。

これで文句はねーだろ。

そんな態度だった。

しかし、今度は突き出すなり帰る、なんてマネはしない。

不機嫌な顔で相手を睨んだままだが、その場を動かないのだ。

ヤマダは、書類を確認しているようだった。

目と指先で内容を追って、それが最後のところまでたどりつく。

「はい、結構です」

にこっと。

まるで学校の先生だったら、『よくできました』と言いそうな笑顔で微笑むと、その書類を受理してくれたのである。

「結婚、おめでとうございます」

その笑顔のまま、頭を下げられてしまう。

カイトが、びくっと硬直したのが分かった。

「おめでとうございます」

側にいた他の職員までもが、祝福の笑顔を2人に向けてくるではないか。

その声が結構大きかったせいか、役所に来ていた一般の人たちの視線まで向けられてしまう。

「お、婚姻届ですか？　おめでたいですねぇ」

などと、近くから聞こえてきた。

メイは。

照れて、真っ赤になってしまった。

いきなり、周囲の温かい視線にさらされてしまったのである。

落ち着かないこと、この上なかった。

「結婚記念日は今日になりますね…1月11日…ああ、1ばかりで覚えやすい日でよかったですねぇ」

ヤマダが、笑顔で畳みかけてくる。

カイトは硬直したままだ。

メイ同様、こういう状況に慣れていないのである。

いきなりスポットライトが当てられて、あなたたちが主役です、というような状態なのだ。

カイトは。

ついに耐えられなくなったようで。

来たときと同じように、むんずとメイの手を掴むと、役所を後にしたのだ。

歩きながらも、後ろからにこにことした笑顔と、祝福の波動が伝わってきて、メイでさえ振り返ることが出来なかった。

そのまま、無言で2人ずんずんと役所から歩いて逃げ、車に乗り込む。

ドアを閉める。

はぁ。

2人、同時に安堵のため息をついてしまった。

カイトの方を、視線の端で盗み見る。

すると、向こうもそうした瞬間だったようで、ばちばちっと目が合う。

カァ。

2人で――赤くなってしまった。

「……送ってく」

カイトは、いきなり忙しくなったような様子でエンジンをかける。

「あ、大丈夫…バスで帰れるから…カイトお仕事あるし」

車中の時計を見ると、１２時４０分。

いまからなら、カイトはきっと1時までに会社に戻れると思ったのだ。

そして、車のドアを開けようとしたら。

ばしっと。

運転席の手が、彼女の腕を押さえるように止めるのだ。

振り返ると、カイトがどういう表情を作ったらいいかも分からないような顔で、自分を見ていた。

「送る…」

そんな目で。

そんな、もどかしそうな目で見られては、断れるハズがなかった。

『でも会社が…』とか言おうと思ったのに、それさえ言えなくなってしまう。

だから、きちんと身体の向きを前の方に直して座り直す。

ようやく、カイトが手を離してくれた。

よかった。

車が走り出した時に、メイはポツリと思った。

彼が、再提出を拒んでいたのだというのが、誤解でよかったと本当に思った。

そして、困った。

夫婦だというのに――――　車の中での気楽な会話一つ、見つけられないままだったのだ。

01／11 Tue. ―7

□

婚姻届の書類に、書き込みを終えたものの。

カイトは、それを渡すことが出来なかった。

いろんなことを、頭の中に渦巻かせてしまったのである。

メイを信用していないワケではない。

そうではないのだが。

この、カイトにとっては非常に重大になってしまった書類が、本当に無事提出されるかが、心配だったのである。

途中で、彼女に何か不慮の事故が起きてしまったら。

もしくは、途中で彼女の気が変わってしまうようなことがあったら。

どちらも、絶対にあってはいけないところではあるのだが、人生何が起きるか分からない。

彼自身、一番よく知っていることだった。

いきなりメイと出会って、恋のどん底まで突き落とされ、頭をかきむしるような幸せで辛い日々を味わい、人生最悪と最高をとんでもない落差で味わったのである。

その衝撃は、ジェットコースターなんかじゃない。ナイアガラの滝だ。

だから、未だに自分が生き延びていて、しかも、彼女と婚姻関係になれたことさえ信じられないのだ。

婚姻関係については、彼の短気のせいで、現在未遂の状態だったのだが。

その過去があったおかげで、すっかりカイトは心配性になってしまった。

苦労して手に入れた彼女を、何かのはずみでも失いたくないのである。

絶対確実。

それが欲しいのだ。

だから、差し出された手に書類を渡さなかった。

代わりに――　その手を、掴んだ。

※

今日は平日だ。

だから、役所の普通の窓口が開いている。

カイトは、メイを車から降ろすと、そのまま引っ張って自動ドアをくぐった。

とにかく、目的に向かって突き進む。

敵、右斜め４５度、というところか。

カウンターに、彼の手が触れる瞬間。

誰か男が近づいてきた。

顔は覚えていないが、あの黒い腕カバーは、記憶に残っている。

昨日、婚姻届の処理をした男だろうか。

かなり頭に血が上っていたために、はっきりとした記憶には刻まれていなかったのだ。

「あぁ…あなた方ですか」

という声が、開口一番に出てくるところを見ると、やはり昨日の職員であることは間違いない。

そういえば、こんなトロくさそうな、フニャフニャした顔だったような気がする。

カイトの生活速度とは、生物学的に違うのかもしれない。

それを言うなら、メイもそんなにパキパキした性格ではなかった。

どちらかというと、この職員と同じ枠の中に入るのかもしれない。

しかし。

彼女は、いいのだ。

とにかく、あのままでいいのである。

「いやぁ、昨日何度かお電話を差し上げたんですが、ご不在のようで心配していたんですよ。わざわざご足労、ありがとうございました」

自分への印象など、気づいていないに違いない。

にこにこと、笑顔で対応してくる。

彼の笑顔に、受け答えをしているヒマはない。

乱暴な手つきで書類を突き出した。

紙が、勢いでばしゃっという音を立てる。

昨日からのカイトの所行のせいで、その用紙はシワだらけになりつつあった。

大事な用紙に、優しくしてやらないからだ。

昨日は、このまま帰った。

とにかく、用紙を渡してしまえば、それで結婚がＯＫだと思って

いたのである。

しかし、結果的には二度手間になってしまった。

いくら頭に血が上っていたとはいえ、腹の立つ出来事だ。

だから今日は、我慢してここで待ち続ける。

今度こそ、受理される必要があった。

これ以上、書き直しなんてごめんだったのだ。

イライラしながら、職員のトロくさい指と目の動きを睨む。

時々、一カ所で止まるような瞬間があれば、カイトの方がビクリとしてしまいそうだった。

「はい、結構です」

最後までたどりついた後。

職員の声と笑顔が、カイトを安堵させた。

これで間違いなく、メイと結婚したのである。

世界中に、それを認めさせたのと同じだった。

ほっとしたのもつかの間。

「結婚、おめでとうございます」

いきなり、温かい笑顔と声を向けられた。

確かに、この職員はさっきまでも穏やかな感じではあったが、その色と温度が変わったようにさえ感じられたのである。

そう。

祝福というものだ。

思えば。

改めて、分かりやすい祝福を感じたのは、これが初めてだった。

ソウマの家で何か言われたかもしれないが、あの二人の言うことなど、まともにカイトは聞いていなかった。

とにかく、気に障ることばかりが起きるので、全身棘だらけの状態だったのである。

シュウは、一瞬笑っただけだ。

十分珍しい事態であったが、それ以外の反応はなかった。

後は、まったくいつもと変わらず、である。

こういう見ず知らずの人間に、一般論として結婚を祝福されるとは思ってもいなかったのだ。

その波動に巻き込まれたのか、側にいた職員も「おめでとう」、

と。

周囲の、関係のない一般市民までもが、自分らを噂しているようにさえ思えた。

背中がむずむずする。

このままでは、『今ここに誕生した、うら若い夫婦への祝福の波動』というもので、腐らされてしまいそうだった。

耐えられっか！

カイトは、その落ち着かなさにめまいを覚えながら、しかし、メイの手をしっかりと握って、役所を逃げ出したのだ。

後ろから、視線が追いかけてくるのを振り切るようにして。

ひたすら、車を目指した。

自分が運転席側に。

メイが助手席側に乗り込んで、バタンとドアを閉める。

はぁ。

そんなため息を、同時に洩らした。

彼女も、あの視線は落ち着かなかったのだろうか、と視線をそっちにやると、向こうもこっちを見ようとしていた。

ばちっと視線が合う。

二人――　赤くなってしまった。

な、何やってんだ。

たかが、目が合っただけである。

と、とにかく。

カイトは、焦る頭を切り換えようとした。

まだ、太陽は真上だ。

メイは家に。

そして、自分は会社に戻らなければならなかった。

「……送ってく」

慌ててエンジンをかけながら、ぼそっとそう言った。

「あ、大丈夫…バスで帰れるから…カイトお仕事あるし」

なのに、彼女はその申し出を断ろうとしたのである。

その上、ドアを開けようとする素振りさえするのだ。

あ。

反射的に手が出ていた。

そこに――　いて欲しかったのだ。

確かに、まだ二人きりでいるということに慣れないことはたくさんある。

居心地が悪いと言えば、そうだった。

けれども。

それでも。

そこにいて欲しいのだ。

帰るまでに彼女に何かあったら、などという言葉を理由にするよりも、何よりも、自分がそれを一番望んでいた。

赤い顔で振り返るメイ。

「送る…」

胸に。

溢れるものはたくさんあるというのに、それしか言えなかった。

だから、降りるな。

そう願った。

メイは、一瞬瞳の中を揺らめかせたように見えた。
しかし、その後にゆっくり身体の向きを前に直したのである。
彼の言葉を受け入れるように。
ほっと。
拒まれなくてよかったという安堵感が全身を包んだ。
そして、ようやく手を離すことが出来た。
車を走らせる。
家まで――　もっと遠ければよかった。
※
車は――　家についてしまう。
メイは、車を降りてしまう。
しかし、彼女は運転席側へとぐるっと回ってきた。
慌てて、カイトはウィンドウを下ろす。
「えっと…その」
身体を屈めるようにして、中のカイトを覗き込む。

何か、言葉を探しているようだった。

彼女の性格からすると。

きっと。

お礼の、言葉。

エンジンはかけたまま、カイトはその視線に吸い込まれていた。

「ありがとう…それと、今日はお仕事中にごめんなさい」

ちょっと困った風に笑う。

後半は余計だった。

もしも彼女が遠慮して、あの書類を持ってこなかったら、仕事から帰ってきたカイトがどうなるか、自分で考えても容易に想像がつく。

『どうして、昼間に電話かけなかった！』

とキレるに決まっているのでだ。

この通りの言葉を言えたかどうかは別として。

彼女の遠慮と、その書類に詰め込んだカイトの決意とエゴに、短気を爆発させたことだけは間違いない。

それから、夕飯もそっちのけで、また役所へ直行である。

当然、通常業務は終わっているから、また昨日お世話になった方に行かなければならなかっただろう。

だから。

メイの判断は正しかったのである。

しかし、どうせならその前に、電話をすればよかったのだ。

そうすれば、カイトは会社から戻ってきて、彼女を乗せ、再び役所に行って――　という行動を取れただろう。

わざわざ寒い中、メイが一人であちこち行く必要はなかったのである。

はっ！

そこで、彼はあることに気づいた。

カイトは、自分の胸ポケットのボールペンを取る。

これはメイが、会議室で出したヤツではなかっただろうか。

婚姻届けに、最後の記入をしたヤツだ。

その記念すべきボールペンで。

「手ぇ…出せ」

とっさに書くものを見つけられずに、メイにそう言った。

「え？」

きょとん、と茶色の目が丸くなる。

「いいから、出せ」

と言いながら、すでにカイトは窓から手を伸ばすと、彼女の右手を捕まえて引っ張った。

その手のひらに。

０９０－〇〇〇〇－××××

その白い柔らかい手のひらに、一瞬とまどいはしたが、カイトは筆圧をかけすぎないように注意しながら、そう書き込んだ。

ケイタイ番号だ。

教えていなかったのだ。

だから、あんな秘書室経由で、まどろっこしいことになったのである。

このままでは、もし緊急事態になった時に、連絡を付けることが出来ないではないか。

しかし、これだけではまだ不安だ。

彼女から自分に電話はかけられても、自分からメイを捕まえることは出来ないのである。

ずっと、家にい続けるワケではないのだから。

ケイタイが、もう一つ必要だった。

しかし。

とりあえず今は、これで少しだけは安心できる。

書き終わって手を離してやると、彼女はそれを顔の前に持っていって眺めていた。

「何かあったら…かけろ」

いや、別に何もなくてもかけていいのである。

それどころか、何かあってもらっては困るのだ。

そんな複雑な心理のまま、カイトはその程度のことしか口に出すことは出来なかった。

メイが。

嬉しそうな笑顔になった。

たかがケイタイ番号で、そんなに幸せそうになれるのなら、あと何回でも教えてやりたいくらいだった。

しかし、同じ番号を2回教えたとしても、もうその魔法はきかないだろうが。

「出来るだけ、かけないようにするから…」

嬉しそうに、でも、メイはそんなことを言う。

違う！

そうじゃねぇ！

かけて、いいのだ。

そのために、教えているのである。

「あ、そうだ…」

カイトの荒れ狂う気持ちになど、気づいてないに違いない。

彼女が、いま思いついたとばかりに、そう言い出した。

「今日は、お仕事何時くらいに終わります？」

随分、忙しいみたいですよね。

メイは、少し心配そうな口調になった。

先週、彼が土曜日も仕事に行っていたのを知っているだろう。
家政婦として、しばらく通っていたのだから。
きっと仕事が忙しいと思っているのだ。
いや、忙しくないワケではない。
社長室には書類が山になっているし、開発の方だって次第に納期が迫ってくるのだ。
しかし、しかし、しかし、しかし、しかし、しかし！
「……残業は…ねぇ」
そう、答えた。
まだ。
メイが、自分の身体になじんでいない。
まるで、山川から汲みたてたばかりの水のようだった。
生まれたての固い水。
何度も何度もぶつかって、自分に馴染ませて、柔らかく触れあっているように感じるまで、カイトは彼女の存在には慣れないだろう。
そこまで、とは言わないが――　もうしばらくは、出来るだけ側

にいたかった。

彼女が本当にそこにいる、という事実から噛みしめることに、いまはまだ精一杯なのだから。

「そうですか？」

ぱっと、明るく笑顔が輝いた。

本当に嬉しそうに。

だから、軽く頭を上下に動かした。

「それじゃあ、帰ってきたらすぐ、ご飯に出来るようにしておきますね」

にこにこにこにこ。

カイトが定時で帰ってくるのが、そんなにまで嬉しいのだろうか。

そう考えると、彼の方もたまらなくなる。

メイも、自分と出来る限り一緒にいたい。

そう思っているような気がして。

「じゃあ…気をつけて、お仕事がんばってくださいね」

もう一度、頭をかがめるようにして、車の中を覗き込んでくる。

そんなお別れのセリフを言って、カイトを会社に戻そうと言うのだ。

いや、確かに彼は戻らなければならないのだが。

手を伸ばして。

その頬に軽く、触れた。

せっかく、彼女とこんな時間に出会うことが出来たというのに、きちんと触れた、という気には全然なっていなかったのだ。

手を掴んで引っ張り回したり、降りるというのを引き止めたり、電話番号を書き込んだりと、そのくらいだった。

頬に触れると、彼女がカチンと緊張したのが分かる。

やはり、まだ固い水のままなのだ。

こうやって自分に触れられることに、まったく慣れていない状態。

カイトもそうだった。

彼女への触れ方を、まだ全然分かっていないのである。

「あの…っ」

緊張した唇。

赤くなった頬。

どれもこれもが、ぎこちない反応を返す。

おかげで――　ひどく、ぎこちないキスになった。

01／11 Tue. ―8

○

……社長。

リエは、いやな汗をかいた。

一度目を閉じて、いまの自分の感情を沈めようとした。

社長が――　出ていったきり戻ってこないのである。

その間、取引先からの電話が2件入っていた。

幸い、どちらも急用ではなかったのでよかったが。

時計を見ると、もうすぐ2時。

出ていってから、かれこれ1時間半くらいということになる。

一体、何時に帰ってくるかも伝えずに――　しかも、受付に聞いたところによると、訪ねてきた「自称：妻（？）」の腕を掴むや、一度エレベーターで上に行ったっきり見ていないという。

次に、パーキングの守衛に聞くと、その「自称：妻（？）」を連れて、車で出ていったというのである。

一体、どこに。

いままで、あの社長に彼女や奥さんがいるという噂はなかった。

リエだって、いるなんて思ってもみなかった。

冷静に考えてみれば。

失礼な表現かもしれないが、あの暴君な男と、笑顔でつきあえる女がいるなんて思ってもみなかったのである。

普通なら、あまりのひどさに付き合うまで発展しなさそうだった。

リエでさえ、秘書という仕事上の立場だからこそ、我慢をしているのだ。

ここで、もし彼の短気に頭が来てやめたとするだろう。

そうしたら、あの社長は、『やっぱり女は』というような目で、自分を見そうな気がしたのである。

そう考えると、彼女はますますムキになって、仕事を辞めるなんて思わないようにするのだ。

こうなったらもう、向こうに『必要不可欠な有能な秘書だ』と思わせるしかなかった。

その瞬間を味わうために、リエは忍の一文字で働き続けているのである。

なのに、そんな秘書の心も知らずに、社長は女と出かけてしまったのだ。

無意識に、こめかみに交差点が浮いてしまう。

はっと気づいて、表情をただす。

随分、ストレスがたまっているように思えた。

フィットネスクラブなどで身体を動かしてストレスを発散しないと、ひずみから溶岩が流れ出してきそうだ。

頭を冷やす意味では、水泳がいいかもしれない。

くたくたになるまで泳いで、ベッドにバタンと倒れ込めば、いやなことも思い出さずに、ぐっすり眠れるだろう。

そんな近未来の想像で、何とか目の前のもやのようなストレスを払おうとしているところに、見慣れた姿が現れた。

副社長である。

手には書類だ。

また、彼に決済させるものを、増やそうというのである。

社長室に入ろうとする彼を、リエは呼び止めなければならなかった。

「社長は、ただいま席を外しておられます」

無意識に、イヤミっぽい口調になってしまう。

副社長はぴたりと足を止め、彼女の方を振り返った。

「まさか…開発室の方に？」

それが、一番最初に彼の頭をよぎったのか。

副社長の言葉は、しかし、妥当な線だった。

リエであっても、最初はそう思った。

今日だって、一番最初に社長の所在を訪ねたところだ。

しかし、そこには一度も顔を見せていないということだった。

「いいえ…違います」

分かるはずがない。

いくら頭脳明晰で、分析力の高い副社長であったとしても、これまでただの一度もありえなかった出来事を、言い当てられるはずがなかった。

たとえ、あの社長と同じ屋根の下で暮らしていたとし――　あら？

リエは、目を細めた。

そうなのだ。

社長と副社長は、同じ家で生活しているのである。

ということは、社長が結婚しているかどうかくらい、彼は知っているハズだ。

大体。

やはり、どうしても信じられなかった。

あの社長が結婚しているという事実を。

要素の一つとして、ハルコの存在があった。

彼女は、秘書の職を彼女に渡し、結婚退職したのである。

その後ハルコが、社長宅にハウスキーピングに入ったということは聞いた。

奥さんがいるのに、わざわざ家政婦を雇うだろうか。

ますます、あの「自称：妻（？）」について疑わしさが増すのである。

「社長は、女性の方が訪ねてこられて、出かけられたようです」

リエは、副社長の表情を伺いながら、ゆっくりとそう言った。

ここで彼が、少しでも驚くような素振りを見せるなら、結婚の話はウソだろう。

そう彼女は予測したのだ。

しかし。

思えば、副社長が驚いた顔など、彼女は見たことがなかった。

案の定、彼は別段表情変えることなく、しかも、こう言ったのである。

「そうですか」

そうですか――　こう言ったのだ。

「あの…社長が結婚されているというのは」

かえってリエの方が、その言葉に驚いてしまった。

自分の予測が外れて、本当は社長は既婚者だというのか。

一体、どこで女性を騙してきたのか。

はたまた、完全な政略結婚か何かなのか。

リエの頭の中で、いろんな可能性がめぐる。

「はい、結婚されていますが」

あっさり。

気抜けするほどあっさりと、副社長は答えた。

ほんのすこしの誤解も招かない、正しい言葉だった。

本当、だったのだ。

電話の女性は、「自称」ではなかった。「正真正銘」だったのだ。

「あ、ああ…そうだったんですか」

慌てて取り繕おうとした。

自分一人驚いているのが、バカのように思えたからである。

だから、平静であるかのように顔を作ろうとした。

あの社長が結婚している。

それだけのことだ。

別に自分の仕事には、何の差し支えもないハズである。

「社長は、何もお話になられないので気づきませんでしたわ…いつごろ結婚なさったんですか？」

副社長で有り難いことは。

彼は、聞いた彼女の気持ちなどに興味はなく、事実だけを的確に返答してくれることだ。

だから、リエが守るべきプライドや、仕事に対する感情などに踏み込んでくることはなかった。

だから。

表面上、平静さを作っておくことくらい可能だ。

そうリエは、思っていた。

それを保てると信じて疑っていなかった。

だが。

「昨日です」

副社長は、それだけを言った。

「は？」

リエは、何について言われたのか分からずに、そんな返答をした。

「昨日、社長は結婚されたようです」

もう一度、副社長は、わざわざ言い直してくれた。

はぁ？？？？

カクン

リエの顎が――　外れた。

チン。

エレベーターが開く。

あのシルエットが、まっすぐに社長室に向かってくる。

「社長、お待ちしてました」

副社長は、手に持っていた書類を帰ってきたばかりの彼に手渡す。

顔を歪めて、不承不承という感じで、社長がそれを受け取る。

「その一番上の書類は、大至急ですのでよろしくお願いします。では」

副社長、去る。

社長、不機嫌な足取りで社長室に消える。

そんな、ト書きのような世界が展開している間中――　リエの顎は外れたままだった。

01／11 Tue. ―9

●

お布団も干したし。

洗濯もした。

掃除だって。

今日の晩ご飯は、おでんだ。

午後、帰ってきてからのメイの時間は、そんな仕事たちで飛ぶように過ぎていった。

カイトが、残業ナシで帰ってくると言ってくれたのだ。

こんなに嬉しいことはなかった。

嬉しさの余り、勢いづいて全部やってしまったのである。

ふふっ。

そして、ことことと音をたてるおでん鍋の前で、メイの顔は思い切り緩んでしまった。

自分の右の手のひらを見つめてしまったのだ。

今日、何回こうやって眺めただろう。

書いてあるのは、カイトのケイタイ番号。

すぐにメモに書き写しはしたものの、どうしてもこの字が嬉しくて、消さないように一生懸命努力してしまった。

ボールペンなので、水なんかであっさり消えてしまいそうで。

ついついゴム手袋をしてしまったり、トイレの後は、そぉっと用心して手を洗ったり。

ちょっと消えてしまった部分はあるけれども、まだしっかりとその文字は手のひらに残っていた。

カイトの字。

それが、自分の身体に刻まれているのだ。無性に嬉しかったのである。

これのおかげで寂しくなかった。

家事をしては眺め、また何かをしては眺め、としていると、すぐにカイトの仕事が終わる時間になったのだ。

魔法の文字だった。

そうやって、まだしつこく眺めているうちに。

車が入ってくる音がした。

帰ってきた！

そんなに大きな音では聞こえない。

けれども、メイは手を眺めながらも、耳はダンボのように外の音を拾おうと頑張っていたのだ。

慌ててガスを切って、玄関の方へと駆けていく。

おかえりなさいを、まず言って。

それからそれから……それから？

メイは、その先のことを思いつけなかった。

そうなのだ。

彼が家に帰ってくるというシチュエーションは、いままでに何度もあった。

しかし、結婚した相手として帰ってくるのは、これが初めてなのである。

どういう風に、振る舞えばいいのだろうか。

バカね。

メイは、自分にそう言った。

普通に、いままで通りでいいのだ。

おかえりなさいの後は、前みたいに食事の案内をすればいいのである。

後のことも、全部普通通りでいいではないか。

ただ。

寝る部屋だけが、やっぱり同じというだけで。

バカバカー！！！

また、自分の考えが暴走しそうになって、慌てて急ブレーキをかける。

そうして、現実でも急ブレーキをかけなければならなかった。

そう。

玄関に到着してしまったのだから。

どきどき。

ドアの前で、メイは胸を高鳴らせた。

これが開いたら。

そう思うまでもなく。

ガチャ。

ドアが。

開いた。

「おかえりなさい」

嬉しさが――　そのまま笑顔になった。

※

ドアの向こうのカイトが、何故か驚いたような、呆然とした顔をしているのを見て、メイは「え？」っと笑顔を止めてしまった。

自分が、何かおかしな格好でもしているのかと思ったのだ。

いまの自分の姿を、再確認してみた。

しかし、別に汚れているようにも見えなかったし、おかしなところはないように思える。

もしかして、顔に何かくっつけているのだろうか。

メイが、そう考えた時。

あっ。

彼女は、いきなり引っ張り込まれるような力を感じた。

気づいたら。

カイトの腕の中だった。

そのまま、ぎゅっと強く抱きしめられる。

思いが溢れ出すような、熱い腕だった。

え？　え？　えーーーっ？？

まさか帰ってくるなり、こんな騒ぎになるなんて思わずに、すごいパニックに陥ってしまった。

とにかく彼女は、いままで通りに事を運ぼうと思っていたのだから。

『おかえり』の後は、このまま夕食の案内のハズだったのだ。

なのに、カイトの方の考えは違ったようだ。

全然、いままで通りではなかった。

本当に、彼がこんなにスキンシップが好きな人だとは、思ってもいなかったのである。

いままでのカイトを知る限り、触れようとしたら怒鳴られそうなイメージがあったのに、いざフタを開けてみたら、こんなにも抱きしめてくれるのだ。

「あっ…あの……おか…えりなさい」

焦りながらも、彼女はもう一度その言葉を言ってみた。

抱きしめられることは、イヤじゃない。

それどころか、ドキドキドキドキして、頭がぼうっとなってしまって、おかしくなりそうだった。

カイトの返事は、もっとぎゅっとしてくれることだった。

ああ。

メイは、少しだけ彼の翻訳のためのパーツを、手に入れたような気がしたのだ。

カイトは、あまり言葉が得意ではない。

それは分かっていた。だから、言葉に出来ないような時は、こうやって行動で表してしまうのだ、と。

その中に、たくさんのカイトの気持ちが詰まっているのである。

どのくらい詰まっているのかというのは、彼女にははっきり分からない。

前例が少なすぎるのだ。

しかし、今日のこの抱擁は、『好きだ』という気持ちがぎゅっと詰められているような気がした。

どうでもいい相手に、彼はこんなことはしないだろうから。

そう思うと、胸がきゅっと震えた。

「おかえり…なさい」

もう一回、言ってしまう。

帰ってきて嬉しいという気持ちを、今度はたくさんこめた。

彼の腕に、そんな言葉で応えようとしたのだ。

普通。

夫婦という関係になる前には、恋人という期間がある。

思いを通じ合わせるのが恋人という基準で考えると、彼らのその期間は、約半日だった。

今日の婚姻届の遅れを加算するとしても、1日半である。

そんな短い期間で、お互いの何を知り合えるというのだろうか。

恋人でも夫婦でもない、同居している他人という時間はあった。

だが、その時はあくまで他人同士に過ぎない。

触れあうことだってほとんどなかったし、最初の数日を除けば、1日の中で一緒にいる時間など、ほとんどなかった。

だから、夫婦という時間よりも、いまはまだ、お互いへの恋の部

分を埋めていくので精一杯なのだ。

二人は、恋が成就したばかりなのだから。

「夜ご飯は、おで……んんっっっ」

だからまだ。

全然通じ合えていないキスだった。

01／11 Tue. ―10

□

昼に、メイと出会った。

婚姻届も、その時に確実に提出した。

もう、何の間違いもない。

間違いもない――　というのに。

カイトは、帰宅途中の車中で、鼓動を速くしていた。

この乱れは、『あいつが待ってるぜ、イヤッホー！』というような、楽観的なものではなかった。

とにかく早く帰り着いて、彼女の存在を実感したかった。

何人たりとも、俺を邪魔するな。

そんなオーラをガンガン飛ばしながら、彼は車を走らせた。

幸い神様とやらは、意地悪ではなかったようで、無事に家の門をくぐることができた。

玄関についている明かりに、少しほっとする。

しかし、はやる気を押さえきれずに、急いでガレージに車を入れた。

ドアを開けて車を降り、玄関を目指す。

最短距離を直線で、早足で――　走り出さなかっただけ理性的だったと言えなくもないが、それでも心の中は荒れ狂っている。

だが、玄関の前でピタリと足を止めてしまった。

なぜ、こんなにまで自分が怖がっているのかが、分からないくらいだ。

普通は、もっと気楽に帰るべきなのだ。

そう思ってはいても、どうしても肩に力が入ってしまう。

ふぅ、と一つ深呼吸をしたのが精一杯。

カイトは、覚悟を決めてドアに手をかけた。

ガチャッ。

板チョコレートのようなドアが開いたら。

「おかえりなさい」

いきなり。

声と共に、世界の明るさが一気に変わった。

こぼれんばかりの笑顔が、カイトに向けられている。彼のためだ

けに。

あまりの衝撃に、身動きさえとれなくなってしまった。

心臓が止まってしまうかと思った。

まるで――　お菓子の家。

シュウと同居の味気ない家が、いきなり生クリームとチョコレートと、砂糖菓子で出来たお菓子の家になってしまった。

いままでだって、こういう風に出迎えられた時は何度もあった。

まだ、2人の気持ちが、ちっとも触れ合っていない頃。

でも、それとは意味も、色も、気持ちも、何もかもが違うものなのだ。

笑顔と言葉は、すべてカイトにだけ注がれていて、そして、触れることが許されているものだった。

触れても、いいのだ。

手を伸ばしても。

もう。

ガマンしねぇ。

彼は、その気持ちを強く抱いていた。

メイと心を通わせることが出来てから、それだけは極力譲らない項目として、心の一番上に、大きな文字で書き記しているくらいだ。

彼女について気持ちが渦巻いた時に、もう我慢なんかしたくなかった。

あんなに、死ぬほど我慢し続けた反動だろうか。

どういう理由にしろ、カイトが自分の手を止めることは出来なかった。

その気持ちのまま――　ぎゅっと。

彼女に触れることが出来る。

柔らかさも温かさも、しっかりとカイトに伝わってくる。匂いも音も何もかも。

ほっとするような、それでいて、もっと熱くなるような気持ちが、カイトを取り巻いた。

ずっと抱きしめていたい。もう、このまま腕を解きたくない。

「あっ…あの……おか…えりなさい」

慌てたような声で、メイがもう一度そう言う。

もしかしたら、離して欲しいと思っているのではないかという予測がよぎって、カイトはそれを振り払い、拒否するために、腕にも

っと力を込めた。

まだ、全然この感触に、満足していないのである。

水のような彼女を、全身にしみこませていないのだ。

ぎこちなく、固いままの水。

「おかえり…なさい」

けれども。

今度の言葉は、メイの身体から少しだけ硬直を取り除いた。

抱きしめられることが、イヤではないのだと。

さっきまでのは、ただ驚いただけなのだと教えてくれる気がして、嬉しさが押し寄せてくる。

腕の力を抜いたりはしなかったけれども。

「晩ご飯は、おで……んんっっっ」

勝手に動き出す唇を捕まえて、熱い気持ちを重ねる。

言葉なんかよりも。

もっと、伝えたい気持ちがいっぱいあった。

※

おでん――　終了。

後かたづけ――　終了。

といっても、後かたづけはカイトが監視していた。

怠けないように、ではない。

その逆だ。

メイが、調理場という閉鎖された空間で、必要以上の仕事をしないように見張っていたのである。

カイトが会社に行っている間は、どうしても止めることは出来ないが、自分がいる空間で、必要以上の仕事をさせたくなかった。

一緒にいる時間というのは、意外と短いものだ。

平日ともなれば、朝のちょっとした時間と、会社終了後の夜しかない。

しかも夜というものは、ほとんどが眠るためのものだ。

本来カイトは、フクロウ族である。

夜更かしなんか大の得意で、早起きの方が苦手だった。

だから、夜を長く取ろうと思えば、出来ないことではない。

しかし、メイは、彼よりも早く起きて朝食を作るのである。

しなくていいと言っても、きっと彼女は起き出してしまうのだ。

それを考えると、自分の気持ちだけで、夜更かしを強要することが出来なかった。

寝る部屋を別々にすれば、早く寝る、遅く寝る、の時間差の問題なんか生じないだろうが――　そんなこと、カイトが承諾出来るはずもない。

結局。

あのカイトが、早寝になってしまうのである。

だから、起きている時間など、カイトにしてみれば微々たるものだった。

その微々たる貴重な時間を、家事などというもので奪われたくなかったのだ。

しかし、どうしても最低限の後かたづけをしないと落ち着かないらしいので、しょうがなく我慢しているのである。

こうしている間に、意識の中ではイライラが蓄積されていくばかりだ。

メイがピンクのゴム手袋を外した途端、カイトは手を捕まえて、二階の方へと連行しようとしたのである。

冷てぇ。

カイトは眉を顰めた。

ゴム手袋をしていたようだが、よく考えれば、ゴム手袋は温度を通すのである。

だから、水が冷たいと手も冷たくなるのだ。

はっ。

カイトは、本当に自分が家事に携わらないために、すぐに忘れてしまう事があった。

この調理場には、給湯のシステムがないのである。

メイは、いままでずっと、冷たい水で家事をしてきたのである。

そういえば、最初の頃も同じことに気づいたような気がした。

カイトが、自分でカレー皿を洗った時だったか。

しかし、あの頃はいろんな衝撃的なことが連続して起きていたために、すかっと忘れていたのである。

目の前の、メイに対応するので精一杯の日々だったのだから。

クソッ。

本当に、自分の気の回らなさが腹立たしい。

彼女を幸せにしたいのに、こんなに冷たい手にさせてしまったのだ。

その腹立たしさのために、もっと強く手を握って引っ張る。

それと。

自分だって冷たい水じゃツライだろうに、たかだか給湯設備一つ欲しいと言わない、メイにも腹立たしい。

言えばいいだろ！

怒ったままのカイトは、それを口に出せないまま、部屋に帰り着いた。

「フロ…入ってこい」

だから。

部屋に入るなり、彼女にそう言った。

名残惜しくも、手を離してやりながら。

熱いお風呂に入れば、きっとこの冷たい手も、すぐに温かいものに変わるだろうと思ったのだ。

「あ、カイトから先に…疲れてるでしょう？」

なのに、メイときたら、彼の気持ちなども知らずにそんな風に言

う。

だー！！！

カイトはまどろっこしくなって、彼女の手をもう一回掴む。そのまま、ぐいぐい引っ張る。

目指すは、風呂場だ。

「え？　あ、ホントに…私は後で……」

言葉で抵抗するのも聞かず、カイトは彼女を脱衣所の中に突っ込むと、そのドアをバン！っと閉めた。

ドアの。

向こう側と、こっち側。

「早く…入れ」

カイトは、ドアに背中をもたれさせるようにして、自分自身を重石にした。

「……はい」

背中に――　ようやく観念したらしいメイの声が、小さな振動となって届いた。

01／11 Tue. ―11

●

どうして、こんなにムキになって、彼女を先にお風呂に入れようとしたのか――　メイは、分からなかった。

一生懸命翻訳しようとしたのだが、うまく言葉のパズルが出来なくて。

カイトだって、仕事をして疲れて帰ってきたのだ。

お風呂に入って、リラックスしたいに違いない。

本当に、自分が先に入っていいのだろうか。

しかし、彼は短気で、自分が決めたコトは、テコでも譲らないような人である。

優しいところもたくさん感じていたが、固いところも持っているのだ。

だから、これ以上、メイがどういう風にお願いしても、先に入ってくれることはないだろう。

けど。

まだ。

カイトが、ドアのすぐ向こう側にいるのが分かった。

はい、と答えはしたけれども――　今ならまだ、彼に何か上手な言葉を伝えられるのではないだろうかと思ったのだ。

「あの……」

もう一度、勇気を持って声をかけてみる。

びくんっと、ドアの向こう側の気配が動いた。

間違いなく、数十センチ向こう側に彼がいるのだ。

たかがドアで隔てられただけで、こんなに遠く感じてしまうが、本当はすぐそこにいる。

カイト…。

愛しさと寂しさが、まるでより合わされたロープのように、胸を締め付ける。

ここにいて欲しい、と思ってしまう。

「あの……よかったら、一緒にはいりま……あっ！」

私ったら。

無意識に動いた唇が、何を言おうとしていたのかを、そこまで来てやっと気づいたのだ。

大胆とか、そういうレベルではなかった。

メイは、ドアのこっち側で真っ赤になってしまう。

一緒にお風呂に入りませんか、と、いま自分は誘おうとしてしまったのである。

ということは、2人で裸で明るいバスルームに一緒にいる、ということだ。

もし、そんなことが実現しようものなら、ゆで死ぬ、どころの話ではない。

恥ずかしくて、もう二度と顔を見られないような気さえする。

「あ、ごめんなさい…いやですよね、そんな。すみません…急いで入りますから」

メイは、慌てて弁解した。

彼に、変に思われたに違いないからだ。

一緒にいたいと思った。

けれども、こんなところでまで、一緒でなくてもいいのである。

真っ赤になったまま、メイは慌てて服を脱いだ。

そういえば、まだパジャマはアパートから取って来ていない。

カイトの会社に行かなければならなかったので、大荷物にならな

いように、最低限の下着類だけ取ってきたのだ。

今夜も、シャツのお世話にならなければならないだろう。

けれども、もううっかり彼にシャツを借りていいかなんて、聞くことはできなかった。

また、カイトがパワーショベルなマネをしかねないからだ。

過去に、2回も引き出しの中の服を、ひっくり返されたのである。

今夜だって、そうされるに違いなかった。

後で借りたことを伝えようと、彼女は決めていたのだ。

早く、あのアパートも引き払わなければならない。

しかし、いまのメイは、そんな理性的な思考で動いていなかった。

ただ、さっきの発言を忘れるために、違うことを考えようと努力しながらも、急いでお風呂に飛び込まなければならないのだ。

脱衣所に置いていたゴムで髪を上げながら、メイはドキドキした身体を、ようやくお風呂場に持ち込めたのだ。

急がなきゃ。

カイトをあんまり待たせないようにと、彼女は大慌てでシャワーからお湯を出した。

そうして、温度を確かめるために手を濡らそうとして――　止まった。

あ。

右手に。

魔法の呪文が、書いてあったのだ。

普通にお風呂で洗えば、すぐに消えてしまう程度のささやかな魔法。

でも、カイトの文字だ。

どうしよう。

せっかくの魔法を、今日のうちに消してしまいたくなかった。

とりあえず、左手でシャワーヘッドを持って、温かいお湯で身体を流しながら、彼女は右手を遠くに逃がしていた。水で濡れないように。

気を付ければ、大丈夫よね。

そう思った。

しかし、左手だけでいろんなことをするのは大変だ。

身体を洗う時なんかに、いつも自分がどれだけ利き手に頼っていたかが分かる。

ぎこちない洗い方になってしまった。

かえって時間がかかる。

ああもう。

グズグズしている自分が腹立たしい。

これでは、カイトの疲れを癒すどころではない。

メイは、身体と髪を洗ったら、もうそのままバスタブにはつからずに、お風呂を上がろうと心に決めた。

そうすれば、そんなに遅くなりすぎないだろうと思ったのだ。

急がなきゃ。

身体を泡だらけにしたまま、ふっと手を見ると――　カイトのケイタイ番号。

それに、頬を緩めてしまいそうになった時。

ガタン。

音に、メイはびっくりした。

脱衣所の方で、大きな音がしたのだ。

え？

振り返る。

お風呂場と脱衣所の仕切は、すりガラスのドアになっているので、はっきり向こう側が見えるワケではない。

しかし、シルエットは分かった。

誰かが、その空間にいるということが。

勿論、それはカイトに違いなかった。

どうしたのかしら？

振り返ったまま、メイはきょとんとそのシルエットを見ていた。

すると。

ばさばさっ。

そんな音が聞こえてきた。

そして、シルエットが何か大きな動きをしているのも。

え？

彼女の時が、一瞬止まった。

そして、時は動き出す。

え？　ええー！！！！！？？？？？

服を脱いでいるように、見えたのだ。

ま、待って。ちょっと待って。

全身泡だらけのまま、メイは大慌てだった。

もしかして、カイトはさっき彼女の言いかけてストップした言葉を、実践しようとしているのだろうか。

一緒にお風呂に――　カァッ。

全身が心臓になってしまったかのように、ドキドキに捕まってしまう。

しかし、それを言ってから、随分時間がたっている。

もしも入る気だったなら、もっと早く反応していたのではないだろうか。

いや。

冷静に考えよう。

カイトは、ただ着替えたかっただけかもしれない。

一緒にお風呂に入ろうなんて、思っていないかもしれないのだ。

思い出してみたら、過去、そういう肩すかしが何度もあったではないか。

カイトはしゃべらない人なので、うっかり彼女は誤解をいっぱいしてしまったのだ。

だから今回のも、後からよく考えてみればいつもの誤解で、『私のバカ』と自分に言ってしまう程度の出来事なのかもしれない。

そうよ。

きっと、そうに――

メイは、止まった。

すりガラスのドアの向こうに。

カイトが立ったのだ。

その肌のシルエット。

彼が。

カイトが。

服を着ていない何よりの証拠。

その腕が。

動いた。

01／11　Tue.　―12

□

そこを去りがたく、ついついカイトはドアに背中を押しつけたまま、グズグズとしていた。

別に、着替えをしている音を聞きたいとか、そういうことではなかった。

風呂、という日常の義務のような作業に、彼女を奪われてしまったことが悔しかったのだ。

再びメイが、このドアを開けて出てくるまで、カイトは一人で時間をつぶさなければならないのである。

仕事をすることだって出来た。

開発の仕事は、山ほどあるのだ。

机に置いてあるノートパソコンに電源を入れ、ネットをつなぎ、仕事をすればいいのである。

しかし、まだそれに落ち着いて向かい合えないような気がした。

早く彼女の存在を、空気のようにしてしまわなければいけない。

でないと、本当の日常生活を送っているという気にはならないだろう。

なのに、本当にそんな日が来るかどうか、まったく彼には分からなかった。

「あの……」

そんな彼に、ドアの向こうが声をかけてくる。

メイの方も、まだそんなところでグズグズしているのだ。

早く入れと、もう一度言おうとしたが、それよりも彼女の言葉の方が早かった。

「あの……よかったら、一緒にはいりま……あっ！」

あぁ？

一緒にはいりま――？

はいりま――？

呆然とするばかりだった。

彼女の言った言葉を、もう一度身体の中で反芻しようというのに、ＣＰＵにがっちりとロックがかかってしまったように出来なかった。

しかし、事態は進展していく。

「あ、ごめんなさい…いやですよね、そんな。すみません…急いで入りますから」

後方のドアが、そんな風に慌ててしゃべったかと思うと、ばさばさと服を脱ぐような音に変わったのである。

キィ、ともう一つのドアが開くような音がして、そして、バタンと閉じた。

それから、5分。

ようやく、カイトは氷づけの仮死状態から、生き返りつつあった。

何…だって？

カイトは、まだドアの前。

いろんな情報が追加で入っていたものの、それを処理するよりもCPUのロックを、解除する方が先だったのだ。

彼女が、完全に言い終わらなかった言葉。

おそらく。

一緒に入りませんか？

そう言おうとしたのだろう。言葉の流れ的には、一番自然だった。

BOMB！！！

理解した途端、いきなり心臓が破裂した。

まさか、そんな申し出を彼女にされるなんて思ってもみなかったせいで、心臓が溶岩のように熱い血を送り出すのだ。

彼女は、風呂に一緒に入らないかと誘ったのだ。

これが平静でいられるか。

確かに、彼らは結婚した。

だから一緒に風呂に入ろうが、一緒のベッドで眠ろうが、誰からも文句を言われることはない。

思い返してみれば、彼の両親もよく一緒に風呂に入っていた。

息子であるカイトは、別にそれについて変だ、なんて思ったことなんかない。

ということは。

自分も、メイと一緒に風呂に入っても、別に問題なんてないのだ。

が。

たとえ理屈ではそうであったとしても、それを本当に自分が自然に出来るか、と言われると、まったくダメだった。

いまの心臓の状態を見れば、一目瞭然だ。

今度は、いきなり心臓に火がついた。

さっきまで凍り付いていたとは思えないくらい、一気に燃え上がる。

この気持ちは、イヤとは違う。

そうではないのだ。

ただ、そんなことをしたら、自分の理性がちぎれとびそうな気がするのだ。

かなりの高い確率で。

ちぎれ飛んでしまったら、その場所ですごいことになってしまうかもしれない。

もしそんな真似をしたら、メイにイヤな思いをさせてしまうかもしれないのだ。

軽蔑されるかもしれない。

そんなこと、耐えられなかった。

しかし。

このままカイトが入らなければ、彼女は『やっぱりイヤだったのよね』と誤解をするだろう。

そんな誤解もまた、彼は腹立たしいのである。

となると。

クソッ！

カイトは、自分の理性にガチガチに鎖をかけながら、勇気を出してそのドアを開けた。途端、はっきりと聞こえる水音。

脱がれた衣服は、カゴの中にちょこんと入っている。

カイトは、ぱっと視線をそらした。風呂場のスリガラスも、カゴも。

そして、顔をそらしたまま、服を脱ぎ始めたのだ。

できるだけはっきりと、音をさせるようにしながら。

自分がここにいるということを、アピールしたのである。

でないと、いきなりドアを開けて、メイに悲鳴をあげられてしまうかもしれないのだ。

そうなれば、カイトは悪者だった。

バサバサと服を脱ぎ捨てる。

バックルの音が妙に反響するような気がして、カイトは顔をしかめた。

そんなんじゃ。

そんなんじゃ、ねーんだからな。

ひたすら、自分に言い聞かせる。

何度も何度も言い聞かせる。

これは、彼女が誘ってくれたことであり、自分もイヤではないことであり。

一緒にいるためのことであり――　とにかく、そういうことではないのだ。

全部脱いでしまったカイトは、喉元まで上がってくる心臓を飲み下し、ついにすりガラスの扉の前に立ったのだ。

ぼんやりと、そのドアの向こうにメイがいるのが分かる。

身体の部分が白いのは、洗っていた途中だったせいか。

とにかく、そこに彼女がいるのだけは、カイトにだってはっきり分かった。

ドアに手をかける。

ガチャリ。

勇気を持って、ドアを開ける。

視界には、薄くもやがかかっていた。湯の張ってあるバスタブが、ゆらゆらとゆらめいている。

視界に、メイはいなかった。

そう。

彼は、顔を横にそらしているのだ。

そういうのではないのだから、マジマジと彼女の身体を見るワケにはいかなかったのである。

そんなことをしようものなら、絶対に自爆だ。

このガチガチの鎖つきの理性を、吹っ飛ばされかねなかった。

だから。

中に入るなり、カイトはバスタブに直行したのであった。

01／11 Tue. ―13

●

きゃー！！！

ドアが開く瞬間――　メイは、声にならない悲鳴をあげた。

ギリギリまで往生際悪く、『まさか、そんな』と思っていたために、ついにその時が来るまで、覚悟を決めているヒマがなかったのである。

慌てて、振り返っていた顔を、元に戻すので精一杯だった。

お湯を止めたままのシャワーヘッドを握りしめて、メイはカチンコチンに固まってしまったのだ。

ど、ど、ど、ど、どうしようー！！！

サイフとパスポートをすられて、異国の見知らぬ地に立ちつくすのと、いまの気持ちとどっちがとんでもないだろうか。

それくらい取り乱していた。

いや、元はと言えば、自分から言い出したことである。

後で、はっと我に返ったとしても。

だから、カイトも入ってきたのだ。

あんまり間が空いていたので、今更入ってくるとは思ってもみなかったのだが。

自分から誘ったメイが、こんなに取り乱したら、彼は変に思うに違いなかった。

背中の方で確実にドアが開いて、誰かが入ってくる足音がした。そして、ドアが閉められたのである。

間違いなくカイトで。

それで。

一緒に入る気なのである。

そ、そんなぁ。

メイは身体を洗っている最中だ。いまはまだ、泡に助けられて全身を見られることはないだろう。

しかし、いつかは洗い流さなければならない。

その上、髪も洗わなければならないのだ。

それを――　カイトの視線の目の前でやらなければならないのである。

こんな、素肌をさらしたまま。

後ろの気配が動く。

ビクッッ、と反射的に震えてしまったが、彼は近付いてこなかった。

ばしゃん！

まるで。

大きな魚が生け簀で跳ねるような音がした。

後ろではない。

横だ。

え？

慌ててメイが、そっちに目をやると。

カイトが、バスタブの中にいるのが分かった。

そうして――　壁の方を向いているのが、分かった。

素肌の、首、肩、腕、背中。

メイは、驚いてしまって、ついマジマジと彼の姿を見てしまった。

湯から上に、はみだしている部分だ。

はっ！

慌てて視線をそらす。

そうして、慌てて身体を洗う続きに入った。

カイトが。

わざと、視線をそらしてくれているのが分かった。

彼女の恥ずかしい気持ちを、分かってくれたのだろうか。

急いで身体を洗ったり、髪を洗ったりして交代しないといけない。

カイトだって身体を洗いたいに違いないのに、彼女がここを陣取っていたから、しょうがなくそっちに行ってしまったのだろうから。

お風呂、というのは――　つくづく一人で入るのに適している場所だということが分かる。

何もかもが、二人用というには小さいのだ。

洗い場も、湯船も。

二人でバスタブを使うには、くっついていなければならない。

や、やだ。

自分の考えてしまったことに焦って、彼女は大慌てで身体を流した。

その途中で、ちらちらとバスタブの方を見る。

しかし、やはり彼は顔をそらしたままだった。

髪を。

この期に及んでも、彼女はやはり右手を濡らしたくなかった。

そこにカイトがいる。

その事実に混乱や緊張や、いろんなものがロープのように絡まっているというのに、右手を極力使わないようにして頭を洗ったのだ。

いつもなら、リンスをしてからしばらくおくのだが、今日はそんなヒマもなく、ざばっと流す。

しとしとと滴る髪の水滴を払うと、彼女はもう一度、ゴムで髪をまとめ上げた。

最後に身体をシャワーで流して、顔を洗って、それから、洗い場を流して。

忙しく、カイトと交代するための作業を続けながら、メイは彼の方を見た。

身動きもせずに、彼はそこに沈んだままだった。

こ。

交代、しなきゃ。

全部終わってしまったメイが、声をどうかけようか迷う。

もう当初の目的のように、このままお風呂から上がればいいのかもしれない。

そうすれば、　カイトだってゆっくりお風呂を満喫出来るのである。

「あ、あの……私、もう」

身を縮ませたまま、メイは立ち上がると、外に向かうすりガラスのドアに手をかけた。

ばしゃん！

瞬間。

また、生け簀が跳ねた。

きゃあ！！！

また、悲鳴を飲み込む。

いきなり彼が大きな音を立てて動いたからだ。

いや、いまのメイには、微かな風の音さえも幽霊の声に聞こえるだろう。

「つかれ！」

後ろの方から声がした。

そっと振り返ると、カイトが洗い場の前で、シャワーを持ったまま背中を向けている。

彼の素肌の背中が、バーンと大アップだ。

濡れた肌に、バスルームの明かりが反射している。

その瞬間、身体がぽぉっとなった。

更に、意識が混沌の中に沈んでしまう。

あの、でも、そんな。

メイは、いろいろと言おうと努力した。

しかし、もし彼の言葉を拒否したら、今度は本当にこっちを向かれてしまいそうだ。

メイは、オモチャの兵隊のようなカチカチの動きで、バスタブの方に向かう。

ぱしゃん。

湯船に、足の先を入れる音。

彼女の場合は、小魚か。

熱いお風呂であったことが、それで分かった。

熱いのが好きなのかな。

一つ、彼の好みを知ったような気がした。

メイだったら、ちょっと水を足したいくらいだ。

お風呂の湯を入れる時、食事とかいろいろ間に入るので、冷えないようにと、かなり熱めのお湯を入れておいたのである。

後から追い炊きしなくてもいいようにと。

しかし、冷める速度の方が遅かったようである。

メイは、水を足さなかった。

ちょっと熱かったが、我慢してつかっていた。

理由は――　身体を洗い終わったら、またカイトがつかりに来るからである。

その時に、変にぬるかったら、イヤな気持ちになるんじゃないかと思ったのだ。

彼女は。

右手だけは、お湯につけないようにしながら、カイトがそうしていたように、視線を壁の方へと向けていた。

洗い場では。

やはり、大きな魚を生け簀から、網ですくうような音がしていた。

バシャバシャ、バチャバチャ。

どれが身体を洗っている音なのか、髪を洗っている音なのか、さっぱり聞き分けができない。

しかし、あまりそっちの方を意識しないようにしておく。

でないと、具体的に想像してしまいそうだったのだ。

そんな危険な真似、出来るはずがなかった。

さっき、彼のあの背中を見てしまっただけで、ぽぉっとなってしまったのだ。

頭の中に、そんな映像が合成されたら大変である。

一緒にお風呂に入るって、こういうことなのかな。

熱い湯船のせいで、ますます真っ赤になりながら、メイはそんな風に思った。

世界中の人が、みんなこんな緊張感で一緒にお風呂に入っているのだろうか。

それとも、すぐに慣れてしまうのか。

そんなことを考えていたら、自分に薄暗い影が落ちた。

我に返った時には、もう生け簀の水音がしていなかったのだ。

ということは、いま自分にかかっている影は――　カイトのものなのである。

また、つかりに来たのだろう。

その作業工程が、彼女の予想以上に速かったので、次のことを考えるヒマがなかったのだ。

どうしようぉぉぉ。

交代するべきなのだ。

しかし、いまバスタブから出ると、メイは彼の目の前に身体をさらしてしまうことになる。

もしかしたら、また視線を逸らしてくれているのかもしれないけれども、それを確認することが出来なかった。

何しろ、すぐそばにカイトの素肌もあるのだから。

こんな間近で明るいところで、しっかりと見てしまったら、自分がどうなってしまうか分からなかった。

だから、身動きも取れないままだった。

出なきゃ！！

覚悟を決めた。

身体は見られてしまうかもしれないけれども、きっと一瞬だ。

急いで脱衣所まで逃げれば、本当に一瞬で済むはずだった。

ばしゃっ。

メイは視線をそらしたまま、身体を湯船から持ち上げようと身体を浮かしかけた。

しかし。

カイトの身体が動いた。

出ようとして空いた隙間に、カイトが湯船に足をつっこんだのだ。

彼女が逃げ出そうとするよりも、先の動きである。

そして――　彼の手が、もう一度、彼女を湯船に引きずり戻したのだった。

ええー！！！？？？

01／11 Tue. ―14

□

風呂は、とにかく熱かった。

カイトは、横を向いたままバスタブにつかっていたが、身動き一つとれないまま、釜ゆでの刑を続けていたのだ。

水を入れようかとも一瞬思ったのだが、メイは熱い風呂が好きなのかも、という疑惑のせいで勝手にそんなことが出来なかったのである。

洗い場の方では、シャワーの音が始まったり途切れたり、泡の立つ音がしたり――　挙げ句、何かのはずみに彼女がもらす、呼吸音さえも伝わってきた。

妙に反響する、この空間がいけないのだ。

いま、彼女がどういう状態なのか、リアルに右脳が構築してしまいそうだった。

身体を流している音も、髪を洗っているだろう音も、はっきりと聞き分けたのだ。

風呂場で。

どういう会話を交わすのが自然かさえ、カイトは分からなかった。

普通なら、世間話でもするのか。こういう場合は。

さりげない感じで、今日のことや仕事のことなんかを話すのだろう。

しかし、カイトの今日の仕事など書類作業だ。

こんな話をしたって、メイが喜ぶはずもなかった。

第一、彼自身がちっとも楽しくなかったのだから。

開発の仕事だったらいいのか。

いろいろ考えてはみたけれども、自分が彼女を喜ばせるような話題を持っていないことに気づくだけだった。

言葉では、到底喜ばせられないのである。

じゃあ、一体何なら――

ちらり、と横目を使おうとしたが、白い太腿が視界に入っただけで、カイトはまた視線をそらした。

バスルームは、無用に明るいものだ。

その明るさの中で、水滴を弾いているような白い身体を、どうして彼が直視できようか。

しかも、こんな盗み見るような卑怯なマネ。

カイトは、面白くもない風呂場の壁を見ることになった。

ただ、水滴がこびりついて光っているだけの壁だ。
そうしている内に、洗い場の水音が止まった。
洗うという仕事は、終わったのだろうか。
確認の視線を送ることは出来ない。
「あ、あの……私、もう」
しかし、こともあろうに、彼女の声は出口へと向いていた。
足音が、そっちに向かっているのも分かる。
バスルームを出ようと言うのだ。
バカ野郎！
ざばん、とカイトは慌てて湯船から上がった。
どう考えても、彼女がお風呂で温まったとは思えない。
少なくとも、さっきまで洗い場にいたのだ。
シャワーを使ってはいただろうが、冷えているに違いないのに。
遠慮しているのだ。
彼がバスタブを占領しているので、どかすのが悪いと思ったか―

―　まあ、その辺りだろう。

これでは、カイトは彼女に、カゼをひかせるために入ってきたかのようだった。

一瞬。

網膜に彼女の白い後ろ姿が、くっきりと焼き付いた。

驚いた余り、そっちの方を見てしまったのである。

瞬時にして血流が狂って、目の前が真っ暗になりそうだった。

いわゆる立ちくらみというヤツだ。

だが、それを踏みとどまって、視線をばっとそらした。

「つかれ！」

そう怒鳴るように言うと、彼女がさっきまで使っていた洗い場に背中を向けて陣取る。

カイトだって身体や頭を洗うのだ。ということは、バスタブは空っぽなのである。

何の問題も、あるはずがなかった。

もしも、彼女がまだ出ていこうとするならば、力ずくでもバスタブにつからせようとさえ思った。

そんなにカイトに遠慮するというのなら、このまま彼が出ていったって構わなかったのだ。

しかし、メイはそれ以上の抵抗はしなかった。

ゆっくりとした動きで、後ろを横切って行ったのである。

彼女の歩く影だけを、カイトは視線の端で追いかけた。

ぱしゃん。

小魚が、跳ねた。

やっぱり、メイは熱い風呂が好きなのだろう。

水を入れる様子もなく、そのまま静かにつかっている。

その静かさが耐えられずに、カイトはシャワーの水を出しっぱなしで、身体だの頭だのを乱暴に洗った。

泡を、身体になすりつけた端から流していくような、かなりインスタントな作業である。

そんな風に、バチャバチャやっていると――　ものの数分で、作業が完了してしまった。

顔も身体も頭も、あっという間に洗い終わってしまったのだ。

はっ。

ちらっと、メイの方を見る。

今度は、身体のほとんどが湯の中につかっているのだから、見た瞬間にめまいを覚えるようなことはないだろう。

バスタブは。

二人、入れないことはない。

うまくすれば、見ないままでも、身体を寄せ合うことが可能かもしれないのだ。

カイトは、飛び出そうな心臓を抱えたまま、決意を持ってバスタブに向かった。

その気配を察したのだろうか。

メイは、マイナス同士の磁石のように、代わりにそこを出ていこうと身体を動かしたのだ。

逃げんな！

反射的に彼は、腕を掴んでいた。

オレから……逃げんな。

それが、一番耐えられないこと。

一緒に風呂に、どうしても入らなければならなかったワケではない。

しかし、こうやって逃げられるのだけは耐えられなかった。
その理由が、遠慮だとか恥ずかしい、とかいう言葉であったとしても、それでもカイトはイヤだったのである。
だから。
勢いで。
彼女の背中を抱え込むように――　ドボン！
「きゃあ！」
その勢いでか、彼女が悲鳴をあげた。
きっと、ただの驚きだ。
そうに決まっている。
いや、そうでなければならなかった。
恐怖なんかじゃない。
ただ、驚いたに違いないのだ。
湯船の中で、後ろからぎゅっと彼女を抱きしめたまま、その身体から驚きが逃げ去るまでじっとしていた。
「な…！」
なかなか強ばりの取れない彼女の身体にイラついて、反射的に大

きな声になりそうになって、慌ててその口を一度閉じた。

これ以上怯えさせてどうしようというのか。

すぅっと一度息を吐いて。

「な…何も、しねぇ」

横を向いたまま、カイトはそう言った。

その証拠と言わんばかりに、そっと抱きしめていた腕を放す。

たかが、一緒にお風呂に入るというだけで、このザマだった。

何をしても、彼女とは初めてのことばかりで、不慣れなことづくしだ。

カイトは今まで、こういうスキンシップのある恋をしたことがなかった。

こんな、大事な恋は初めてだったのだ。

結婚したと言っても実感は薄く、まだ恋が他の穏やかな感情を置き去りに、一人だけぶっちぎって走り回っているのである。

ほかの感情は、一生懸命ついていこうとはするものの、遠く遙か後方だった。

だから、こんな風になってしまうのである。

穏やかに慈しんで温めあう恋――　なんて、木星よりももっと遠くだ。

「あの…その……」

なのに彼女は、離そうとしたカイトの手を追いかけた。

そっと片方の手を、両手で優しく捕まえると、自分の身体に回すように動かす。

ズキンッ。

彼の心臓のことを、本当にメイは知っているのか。

こんなに、まるで自分からカイトを求めるような行動に出られると、覚えたことのないような痛みに襲われるのだ。

愛しくて、しょうがない。

「メイ…」

ぎゅっと、もっと抱き寄せる。

その濡れた髪の匂いに、頬を押しつけるように。

「きゃっ！」

しかし。

いきなり、彼女が驚いた声をあげた。

腕の中の存在に、トランスが入りかけたカイトは、それで無理矢理現実に引き戻された。

自分が、何かイヤなことでもしたのかと思ったのだ。

そうではなかった。

彼女は、湯の中に沈んでいた、手をばしゃんと空中に取り出したのだ。

そして。

「よかったぁ…」

本当に嬉しそうな声で、小さくつぶやく。

彼女の視線の先は、右手だった。

たとえ、後ろから抱きしめて目の動きが分からなくても、それだけははっきり分かった。

右の手のひらには。

へたくそな数字が、並んでいたのだった。

それが一体何で、なおかつ誰が書いたかなんて――　考えるまでもなかった。

01／11 Tue. ―15

●

あっ、あっ、あっ。

背中にカイトの胸。

メイは、ガッチガチになったまま、後ろから彼に抱きしめられていた。

湯の熱さとはまったく違う熱が、身体中をかけめぐる。

別に、変なことなんか何もない。

二人は夫婦だし、一緒に暮らしてもいるし、彼女だってすごくカイトのことを好きなのだ。

だから、抱きしめられるとドキドキして苦しいけれども、幸せなことのハズだった。

しかし。

この現状は、あまりにもショッキングで。

だから、心と身体が彼女に無断で驚き続けるのだ。

背中にいるのは、カイトなのである。

信用できる人なのだから、驚く必要なんて何もないはずなのに。

衣服を着ていないというのは――　こんなにも頼りないものなのか。

「な…何も、しねぇ」

そんな驚きが伝わってしまったのだろう。

悪いことをしたかのように、彼の腕が逃げていこうとする。

まるで、ホールドアップだ。

無害であることを証明するような態度。

メイがあんなに驚いたから、悪いことをしたと思ったのだろう。

そんな！

混乱しながらも、それは違うのだと思った。

カイトは、何一つ悪いことをしているワケではない。

ただ恥ずかしくて、彼女が自分の心の制御をうまく出来ないだけだった。

だから、彼が罪悪感を覚えることなんてない。

うまくそれを伝えたかった。

「あの…その……」

言葉は――　見つからない。

どきどきした心臓が、声の出る部分をふさいでいるようなカンジだ。

けれども、腕を動かすことが出来た。

カイトの片腕を捕まえて、自分の胸の方に回そうとする。

こうすれば、どういう気持ちかは伝えられると思ったのだ。

不意に、その腕に力がこもった。

通じたのだ。

彼は、もう片方の腕も持ち出して、メイをぎゅっとしてくれたのである。

安堵と恥ずかしさと嬉しさが、ぱっと彼女の身体の中まで滑り込む。

一体、どれに一番スポットライトをあてていいのか、分からないくらいだった。

「メイ…」

掠れた声で、髪の中にささやかれる。

すごく、気持ちのこもった呼ばれ方だ。

聞いているだけで、ドキドキがどんどん凄くなっていくような。

すぅっと。

まるで引き潮にさらわれる船のオモチャのように、メイは彼の声に連れて行かれそうになった。

ゆらゆらと。

湯の水面がゆらめいている。

伏せかけた彼女の目の中に――　そんな風にゆらめく自分の腕が映った。

あっ！

それが、我に返るボタンだった。

無意識に悲鳴を上げながら、彼女は自分の両手をお湯から出した。

とっさに、どっちの手だったか忘れたのだ。

だから、両手をぱっと自分の方を向けて開く。

右手だった。

間違いない。

左手を湯の中に捨てながら、メイはその字を眺めた。

濡れてはいたが、消えていなかったのだ。

カイトが、昼間残してくれた大事な呪文だ。

「よかったぁ…」

それを小さく呟く。本当にほっとしたのである。

今、自分がどういう状態にあるかなんて、この瞬間はスカッと抜け落ちていた。

だから、いきなり身体に回されていたカイトの右手が外れたのに気づかなかったのだ。

その大きな手のひらは、呪文が記されている右手首をがしっと掴んだのである。

「え、あ？」

メイは捕まれている自分の手と、カイトの表情を見ようと、肩越しに振り返ろうとした。

しかし、余りに角度が急なので、いまの状態では彼の顎を見つけるのが精一杯だ。

「…んだ、これ？」

すごく、怪訝そうな声だ。

きっと顔を見なくても、彼が眉を顰めているだろうことが手に取るように分かるくらい。

ああ、どうしよう。

言い訳なんか浮かぶはずがない。

こんな手のひらのケイタイ番号を、いままで後生大事にしていたということが、彼に知られてしまった。

魔法の呪文みたいだから。

カイトが私の身体に残してくれたから。

その二つの文章は、どちらも彼に伝えられそうになかった。

妙に少女チックで、子供っぽいと笑われてしまうんじゃないかと思ったからだ。

「あ、あの…まだ、書き写してなかったの…だから、消しちゃいけないと思って…あの」

だから、とっさに苦し紛れの嘘をつく。

このくらいの嘘なら、きっと神様だって見逃してくれるはずである。

これで、彼が無罪放免してくれるのではないだろうかと思った。

単なるうっかり者で、済ませてくれそうな気がしたのである。

「後で…」

しかし。

いきなり、カイトはぼちゃんと、彼女の右手を湯の中に沈めた。

「後で、紙に書いてやる…」

そして、もう片方の手で、ごしごしとメイの手のひらをこすったのだ。

あー！！！！

彼女は、手を逃がそうとした。けれども、彼がしっかりと握っているために、それが出来なかった。

あ、あー！！！

心の中で悲鳴をあげる。

ぼちゃん。

再び水の上に持ち上げられた彼女の手のひらは、大変きれいなものだった。

わずかに一カ所、残骸が残っている程度だ。

しかし、それも目ざとく彼に見つけられ、きゅきゅっと指先でこすられると消えてしまう。

綺麗になったぜ。

そんな風な声さえ、後ろから聞こえてきそうだった。そっと手が離される。

メイは、空中で手を止めたまま、じーっとそれを眺めてしまった。

もう、彼の魔法の呪文はないのである。

はぁ、と小さなため息が出てしまった。

こんなことなら、ちゃんと理由を言えばよかった、と。

彼は、親切で洗ってくれたのだ。

書き写しそこねて、消せないでいると思われて。

後で紙に書いてやるから、消してもいいのだと――　そして、消してくれたのだ。

本当は、違ったのだ。

この身体のどこかに、カイトの名前が刻まれているようで嬉しかったのに。

もう一度眺めると、また、ため息が出てしまった。

顎が。

メイは、びっくりした。

カイトの顎が、自分の顔の横からにょきっと出てきたのである。

彼女の肩越しに、顔をのぞき込もうとするかのように。

首を竦めるようにしてそっちを見ると、ほんの間近に彼の目がある。

あのグレイの目が、じっと自分をのぞき込むのだ。

どうかしたのか？

そんな目だった。

気落ちに気づかれたのだろう。

怪訝そうで、少し心配な目の色だ。

たかが手のひらの文字を消しただけで、彼女がこんなにも落ち込むとは思っていなかっただろうし、それが普通だった。

言い逃れを、させてくれないような目だ。

彼女が、さっき手のひらに隠していたヒミツの匂いを、かぎとられてしまったのである。

「あの…ね」

メイは、視線をそらしながらぽそっと呟いた。

「ホントは…えっと……嬉しかった…の」

白状する。

でないと、ずっとカイトに見つめられ続けるのではないのかと思ったのだ。

「カイトの字が書いてあるのが…嬉しかったの。何か…私にしるしが残ってるみたいで…」

そこまでしか言えなかった。

やっぱり、だんだん恥ずかしくなってきたのだ。

心の内側を聞かせてしまった上に、手のひらの字も消されてしまった。

ドクンっ。

そんな強い鼓動を感じた。

一瞬、自分の心臓が暴走したのかと思った。

違う。

メイは、びっくりした。

彼が肩越しに顔を前に突き出していたため、彼女の背中とカイトの胸がぴったりくっついていたのだ。

だから、さっきのは――　カイトの心音。

身体ごしに伝わるくらいの、強い鼓動だったのである。

「んな…字より……」

カイトの声が、不安定な響きを持っているように感じた。

微かに乱れたような呼吸の下から、声を出そうとしているような。

右手が、もう一度捕まれた。

きゅっと強い握力を感じる。ドクン、ともう一度背中で心音がした。

引っ張られる。

右腕を持っていかれる。

「メ…イ……」

苦しそうな声が、持って行かれた腕のすぐそばから聞こえた。

濡れた腕に吐息がかかる。

ゾクッ。

熱い湯の中なのに、背筋が冷たくなって――　今度は、間違いな

く自分の鼓動が高く鳴った。

01／11 Tue. ―16

□

彼女の手のひらを汚していた、自分の字。

それに、もう一度ご対面することになろうとは、思ってもみなかった。

しかもバスタブの中で。

聞けば、書き写しそこねていたという。

だから、消さないように努力していたのだと。

そんくれぇ。

カイトにとっては、ささやかな不満のタネだ。

そのくらい、もう一度聞けばいいのである。

家の中なら、書くものがいくらでもあるのだ。

だから。

いつまでも、彼の汚い字を残しておく必要なんかないのである。

しかし、そういうことを言っても、メイは遠慮して消さないような気がした。

その予測のおかげで、短気な彼は実力行使に出たのだ。

ぐいっと手をつかんで湯の中に沈める。

もう片方の手でごしごしと、そのやわらかい手のひらをこすった。

あんまり強くすると痛いのではないかと思って、ちょっと力を抜く。

途中で一回、湯から上げてきれいになったかを確認する。彼女の肩越しに。

ほんの少し残っていたので、そのままきゅきゅっとこすると――

完全に消えた。

よし。

カイトは、悦に入った。

これで、彼女はすっかり綺麗になったのである。

そして、それをしたのが自分だ。

ささやかな満足感に包まれて、カイトは幸せだった。

メイの手を解放してやる。

彼女も、これで安堵するのではないかと思った。

わざわざ、手の汚れを消さないようにと、努力する必要がなくな

ったのだから。

なのに。

彼女は、肩を落として落胆したようなため息をついたのである。

何だと？

これには驚いた。

彼にしてみれば、いいことをした気持ちになっていたというのに、ひどく残念そうな反応だったのである。

そんなはずがないと、カイトは彼女の顔を見ようと首を突き出した。

この角度だと、メイの肩を乗り越えるしか方法はないからだ。

気配に気づいたのか、向こうも彼の方を向く。

非常に窮屈で、間近な角度で目が合った。

驚いてはいたけれども、メイの表情には、さっき彼が予想したような落胆の影があったのだ。

何でだ。

いまの自分の行為が、どうして彼女を落胆させたのか、ちっとも分からなかった。

だから、じっと覗き込んで心を探そうとした。
ちゃんと理解したかったのだ。
「あの…ね」
視線が逃げる。
そうして、恥ずかしそうに洗い立ての唇を開いた。
「ホントは…えっと……嬉しかった…の」
はぁ？？？？？
続いた言葉を聞いたが、カイトにはちっとも分からなかった。
一体何が嬉しかったというのか。
手の汚れを落としたことが嬉しかったのだろうか。
しかし、さっきの落胆の反応とは、食い違うような気がする。
先走る予測を押さえつけて、次の言葉を待った。
「カイトの字が書いてあるのが…嬉しかったの。何か…私にしるしが残ってるみたいで…」
すると。
なんと。

そんなことを、言い出すではないか。

カイトは絶句した。

あの落書きを、彼女は嬉しかったというのである。

とにかく、ケイタイ番号を教えずにはいられなかったカイトが、とっさに彼女の手を捕まえて書いた落書きが、嬉しくて。

まるで。

そう、まるで――　今まで大事にしていたかのように。

『私にしるしが残ってるみたいで』

シルシ。

カイトが、彼女に刻んだ文字。

そんなものを後生大事にしていたのだ。

だから、消されたくなかったのである。

早く言え！

カイトはそう怒鳴りそうになった。

だが、もし素直に言われた時に、自分がそれを消さずにいられたかどうかという話になると。

多分答えは、どっちにしろ消した、というところだろう。

確かに彼女が、たかがカイトの文字を、ここまで大事にしてくれていたことは嬉しい。

しかし、こんな文字よりも、いまここにカイト本人がいるではないか。

それが理不尽だった。

本人がいるなら、そんなシルシよりも本人をもっと見ればいいのである。

彼は、もう一度彼女の腕を捕まえて引っ張った。

「んな…字より……」

ぐっとひっぱった腕に唇を寄せる。

もっと別のしるしだって、カイトはつけることが出来るのだ。

そんなに欲しいなら、いくらだって残してやることが出来る。

腕を。

「えっ…」

メイが、ビクッと手を震わせたが逃がさなかった。

腕を――　強く、吸った。

唇を、そっと離す。

お湯の中で上気していた肌でもよく分かるくらい、赤い跡が残っていた。

カイトの唇に残っているのは、柔らかく濡れた腕の感触。

これも。

間違いなく、しるしというものだ。

腕を離してやると、メイはその跡を見つめているようだった。

「それだったら……洗っても消えねぇ」

ぼそっと。

彼は、そういうマヌケなフォローをするので精一杯だった。

汚い字がよくて、それがダメということはない。

理屈ではそうだ。

しかし、勢いでしてしまったものの、カイトは彼女の反応が気がかりだった。

また、落胆のため息をつかれてしまうのではないだろうかと思ったのだ。

「あ…」

ため息はなかった。

しかし、メイはお湯の中にいるというのに、更に首を赤くしたのである。

カァッと。

ゴムで髪を上げているせいで、その変化がはっきりと見て取れた。

ズクン。

胸に強く刺さったものが、危険信号を伝える。

いつも彼女の反応は不意打ちだ。

不安になったカイトの予想を遙かに高く飛び越えて、彼の心臓を台無しにしようとするのである。

猛烈に強く抱きしめたい衝動が、ガンガンと追い炊きされてしまう。

そして――　我慢できなかった。

そのままぎゅうっと。

彼女を強く抱きしめた。

赤くなった首筋に唇を埋めて、強く吸う。

メイの身体に、自分というしるしを残してしまいたかった。

「メイ……」

最後まで、彼女の名前を囁こうとした。

しかし、途中ではっと我に返ったのだ。

まだ、ここはバスルームなのである。

そして、彼は何もしないと彼女に言ったのだ。

他の人間との約束なら、いくらだって破るだろう。

しかし、彼女の信用を失う真似だけはしたくなかった。

けれども、このままここにいては――　きっと、もうちょっとで弾け飛ぶに違いないのだ。

クソッ！

胸をかきむしりたい衝動をこらえて、カイトはざばんとバスタブから身体を引き起こした。

彼女一人を残して。

カイトは、風呂場を逃げ出した。

バタンと強くすりガラスのドアを開けると、水滴をしたたらせたまま脱衣所に入ったのだ。

彼女からどんなに逃げようとしても、身体の中のマグマは燃えさかるばかりで、一向に静まる様子がなかった。

身体を拭いても。

着替えても。

脱衣所のドアを開けても。

メイを――　抱きしめたくてしょうがなかった。

もう、我慢するのはやめたはずなのに。

01／11 Tue. ―17

●18

いきなり、カイトがいなくなってしまうものだから、メイは驚いた。

驚いた上に、バスタブにしがみつかなければならなかった。

今までずっと、彼に背中を支えてもらっていた形だったのだ。

その支えが、不意になくなってしまったのである。

さっきの勢いを覚えている水面が、まだ激しく波打っていた。

脱衣所の方で、ガタガタやっている音がする。

どうやら、もう彼のお風呂時間は終わりらしい。

どうして？

メイにしてみれば驚くばかりだ。

首筋に唇を埋められた時、指先までしびれた。

抱きしめられた強い腕に、どうにかなってしまいそうだったのだ。

しかし、そんな途中でいきなりザバン、である。

いや、そのまま続けられたとしても困るのだが。

ここはバスルームで、明るくて、既に二人とも何も身につけていない、という無防備のカタマリだったのだから。

何が。

何がいけなかったのだろうか、と考えてみたけれども、別に彼女が原因であるような出来事は見あたらなかった。

というころは、単なる気まぐれだろうか。

しゃべらないカイトの気持ちを、きちんと掴めるようになるまで、まだまだたくさんの時間が必要だった。

けど。

メイは、そっと自分の腕を見た。

肘と手首の真ん中くらいのところに、赤い跡が残っていた。

カイトの唇が残した跡だった。

彼の文字が消えてしまって、寂しい思いをしている彼女に、そんなしるしをつけた男。

確かに、これなら洗っても消えないだろう。

恥ずかしくて、嬉しかった。

穏やかになった水面の中で、彼女は何度もその跡を見つめ直した。

カイトの唇が、こんな風に当たったんだ――　そう予測してしまう。

その映像を想像しそうになって、慌ててメイはそれを追い払った。

彼が目を閉じて、腕に唇を寄せて。

キャー！！！！！

追い払おうとしたのに、また妄想が押し寄せて、彼女はお風呂の中で暴れた。

こんなことをやっている場合ではなかった。

カイトが、先にお風呂をあがってしまったのである。

何か大きな問題が起きたとは思いにくいので大丈夫だろうが、やはり心配ではあったのだ。

メイも、湯船から出た。

くらっとめまいがする。

立ちくらみだ。

思えば、あんな熱い風呂に長い間つかっていたのである、たちくらみがしても当然だった。

あら？

洗い場のところでクラクラっときて、メイは壁に手をついてこらえた。

真っ暗な目の前が、赤や黄色に点滅する。

そのままこらえようとしたのだが。

ガタガシャーン！

支えきれなくなって膝を崩す。

巻き込んだのは、シャンプー類の小さな棚。

痛みは全然なかった。というか、それどころではなかった。

座り込んで、血が全身に回りきるまで、おとなしくしているしかなかったのだ。

「メイ！」

しかし。

その音は、外まで伝わったのだろうか。

ためらいのない音が、バタンとすりガラスのドアを開けて名前を

呼ぶ。

カイトだ。

その頃には、ようやくめまいも取れてきたので、彼女は顔を上げた。

パジャマ姿のカイトが、そこにいた。

「あ、ごめんなさ…ちょっとたちくら……」

メイは、大丈夫なことをアピールしようと笑顔を作る。

けれども、最後まで言うまでもなく、一度カイトがぱっと身体を翻す。

しかし、一瞬だけだった。

次に戻ってきたカイトは、手にバスタオルを持っていて。

それで、彼女をくるんでくれたかと思うと。

「きゃあっ！」

驚いた。

いきなり、視界が一回転したのだ。また、めまいでもしたのかと思った。

しかし、目眩ではなかった。

彼女は――　カイトに抱きかかえられていたのだ。

バスタオルのまま、布団の中に押し込まれる。

「んな、熱ぃ風呂に長く入ってっからだ……」

ベッドのへりに腰掛けたままのカイトに、そんなことを言われる。

言われて当然である。

しかし、心配でたまらない色をしていた。

彼が言葉に込めた気持ちが、いっぱいに押し寄せてくる。

しゅーん。

迷惑をかけてしまったという事実が恥ずかしくて、メイはちっちゃくなってしまった。

「ごめんなさい…でも、カイト、熱いお風呂が好きみたいだったから」

だから、お水足せなかったの。

メイは、布団の内側に唇を隠すようにもそもそっと言った。

その時のカイトの顔ときたら。

目を見開いて、一体何を言っているのか、理解できないような表

情を作ったのだ。

「あ、熱い風呂が好きなのは、おめーの方じゃ…？」

驚きのまま、呆然とした唇がそんなことを言う。

ええぇぇぇぇ？？？？？

今度驚くのは彼女の方だ。

あんな熱いお風呂に、カイトは文句も言わずにつかっていたのだ。

それが好きなのだと、メイは信じて疑っていなかった。

「だって……」

「けど」

二人。

同時にお互いの表情に驚きながら、そんなことを言った。

そして。

ようやく分かったのだ。

二人とも、お互いが熱い風呂が好きなのだと誤解して、水を足すのを遠慮していたのである。

我慢して、熱い風呂の中に沈んでいたのだ。

ア然。

こんなにまでも、言葉の疎通がないと誤解になるものなのか。

あんなに彼のことを理解しようとしたのに、結局は見事な空回りであったことを、ここではっきりと分かってしまったのである。

「バッ…」

カイトは、眉を跳ね上げた。

しかし、それをぐっとこらえてくれる。

「カイト…」

もうめまいなんかしない身体を、ゆっくりとベッドから起こす。

胸を隠しているバスタオルを、押さえるようにしながら。

「バカ…野郎……ちゃんと、言え」

ベッドに膝で乗り上がるようにして、彼が近づいてくる。

そして、苦しそうな声でぎゅうっと抱きしめてくれた。

すごく、強い腕で。

パジャマの布に、ぎゅっと顔を押しつけられる。

その身体に腕を回す。

背中の布地をきゅっと掴んだ。

「カイトも……ちゃんと…言って」

こんなにまでも、分からないもの同士なのである。

たかがお風呂の好み一つ分からずに、見事に失敗してしまったのだ。

ちょっと言葉を交わせば、すぐに解決した出来事なのに。

「好きなものとか、いろいろ…ちゃんと、教えて…」

全部、知りたかった。

全部教えて欲しかった。

いまどう思っていて、どういう気持ちなのか。

少しずつだって構わないから、言葉で教えて欲しかったのだ。

なのに。

一度身体を離したカイトに、熱い目でじっと見つめられた後、また無言で強く抱きしめられた。

「メ…イ…」

言われた言葉は、それだけ。

後は、全部強い力だけだった。

01／11 Tue. ―18

□

カイトは、脱衣所に続くドアから、離れることができなかった。

あんな中途半端な状態で、彼女と自分を引き剥がしてきたのだ。

身体の中で荒れ狂う溶岩を押さえきれずに、彼はイライラしながら、メイが出てくるのを待った。

彼女が衣服を身につけて、このエリアに帰ってきたらもう大丈夫なのだ。

抱きしめようとも、キスをしようとも。

何もかも許されるハズであった。

そんな時だった。

何かが転がるような、派手な音が浴室から聞こえてきたのは。

頭の中に疑問が浮かぶよりも早く、驚きのままカイトはドアを開けて脱衣所を横切り、バスルームに踏み込んだのだった。

「メイ！」

何が起きたのか。

その光景を見て、はっきりと分かった。

彼女が洗い場のところで膝をついて座り込んでいたのだ。
壁に手をつくようにして。
めまいを起こしたのだ。
カイトは。
何か言いかけた彼女を置き去りに、ぱっと身を翻した。
早くここから連れ出してやりたかったが、まだメイは裸のままなのだ。
そこらにあるバスタオルをがしっと掴む。
戻るなり、彼女の身体をそれで包み込むと。
ぐいっと。
驚きの悲鳴をあげるメイを――　そこから助け出したのだった。
お風呂場から直行してきた湿った身体を、そのままベッドの中に押し込んだ。
本人は、大丈夫そうなことを言っていたのだが、カイトはそんな言葉では納得しなかった。
彼女は、大丈夫じゃない時まで大丈夫と言う性格であることが、だんだん分かってきていたからだ。

初めて一緒にお風呂に入って、こんな騒ぎになってしまった。
カイトも普通じゃなかったし、彼女もそうだ。
たかが風呂、のハズだったというのに。
こんなことでは先が思いやられてしまう。
「んな、熱ぃ風呂に長く入ってっからだ……」
ベッドのへりに腰掛けて、彼女を見る。
本当は心配なくせに、自分の口ときたらこんな風にしか言えないのだ。
もっと、いたわるセリフが出てこないのか。
「ごめんなさい…でも、カイト、熱いお風呂が好きみたいだったから」
布団の陰に唇を隠すようにしながら、メイは小さな声でそう言った。
はぁ？
それには驚いた。
一体、どういう経緯で、彼が熱い風呂が好きだと思ったのか。

そんなこと、いままで言ったこともなかったハズである。
「あ、熱い風呂が好きなのは、おめーの方じゃ…？」
だから、呆然としながらそう言った。
それが、カイトの水を足さなかった理由だ。
「だって……」
「けど」
二人、言いかけた言葉をそのままに言葉を止める。
正確には、絶句だった。
そこで、やっと理由が分かったのである。
どうして、お互いこんな誤解をしてしまったのか。
ただ。
ただ単に、あの風呂が熱かっただけなのだ。
彼らの好みや希望はそっちのけで、ただ熱かっただけなのである。
メイの好みだと思って、水を足さなかったカイト。
カイトの好みだと思って、水を足さなかったメイ。
一生懸命相手を探る余り、まったくもってお互い見当はずれのこ

とをしていたのだ。

たかが、わずかな言葉が足りないだけで。

どちらかが、一言聞けば済むことだった。

言えよ！

そうなると、カイト心の中が一気に攻撃姿勢に入る。

熱い風呂がつらかったなら、ちゃんと言えばよかったのだ。

そうすれば、こんなことにはならなかっただろう。

と、いきなり相手への要求が突っ走った。

たかが風呂の温度くらい、遠慮する必要なんかないのだ。

「バッ…」

怒鳴りそうになった。

それに気づいて、慌てて止める。

「カイト…」

もうめまいの方は大丈夫なのか、メイがゆっくりとベッドから起き上がってきた。

その身体を。

「バカ…野郎……ちゃんと、言え」

ぎゅっと抱きしめる。

結婚したのだから、もう何の遠慮もいらないのだ。

勿論、その前から遠慮しなくていいと思っていた。

しかし、今は遠慮する必要の方がないのだ。

夫婦って、そういう関係じゃねぇのかよ。

よく知りもしないクセに、カイトはそう思った。

だから、思い切り彼女は、自分に甘えてきていいのだ。

もっと身体を預けるように、寄りかかって欲しかった。

おまけに、この時のカイトは、棚の上に上がっていた。

本人はそれにまったく気づいていなかったけれども、メイに言い当てられる。

「カイトも……ちゃんと…言って」

そう。

カイトは、自分がお湯の温度について言及しなかったことを、棚の上に上げていたのだ。

しかし、彼にしてみればそれは遠慮ではなかった。

彼女が熱い風呂が好きなのなら、別に自分はどうでもよかったのだ。

メイが、それで幸せだと言うのならば。

そして、また考えないのだ。

相手も、いま自分が思ったようなことを考えていたのであって、遠慮しているわけではないということを。

お互い相手を大事にし合っている――　それにうまく気づけないでいるカイトは、やはり一方的な要求ばかりを彼女に押しつけてしまうのだ。

「好きなものとか、いろいろ…ちゃんと、教えて…」

そんな気持ちに気づいているのか、メイは、日頃重い彼の口をこじ開けようとするのである。

確かにカイトは、おしゃべりというワケではなかった。

しかし、仕事上必要な言葉はしゃべるし、取引の時なんかは交渉を自分のペースに持ってくるために、攻撃的にしゃべり続けることだってある。

そんな彼なのに、メイの前でだけは、口にロックがかかったように重くなるのだ。

しゃべりたくないワケではない。

うまく、言葉を探せないのだ。

こんな気持ちになったのはこれが初めてだ、というような荒れ狂う感じとか熱い感じとかが、波のように何度も押し寄せてくるために、言葉が機能しないのである。

そして――　こんな綺麗じゃない言葉しか出てこないのでは、彼女を幸せにできないとも思っていた。

だから、余計に口が動かないのである。

けれども、いま彼女は、カイトにしゃべって欲しいと思っているのだ。

苦手だけれども、その願いに答えてやりたかった。

一言でもいいから。

『好きなものとか、いろいろ…』

メイは、そう言った。

カイトの好きなもの。

そんなにたくさんはない。ほんの一握り。

プログラムとバイクとチキンカレーと。

いや、そんなどこにでも転がっているようなものじゃない。
スペシャルでデラックスな、たった一つだけのもの。
それが、カイトの中にはあった。
「メ…イ…」
それが――　彼女の問いに対する、精一杯の答えだった。

01／12　Wed.　―1

□

珍しく、朝がカイトに優しかった。

大体、その存在は彼にとってずっと敵であり続けた。

朝が苦手で、いつも苦しめられてきたのだ。

しかし、最近は違う。

朝というものは、目が覚めるということであり、そして、彼女に出会うことが出来るというスタート地点でもあったのだ。

だから、メイのいる朝は、だんだん彼にとって違う意味を持つようになってきていた。

そうして、ついに。

何かに引かれるように、彼はすっと瞼を上げたのだ。

メイが――　すぐそこにいた。

うぅ。

あどけなく眠るその顔を見てしまった瞬間、身体が彼女をぎゅっと抱きしめたがった。

しかし、唸るようにしてこらえる。

まだ、メイはぐっすり眠っているのである。

いまの彼の衝動で抱きしめると、彼女を起こしてしまいかねなかった。

だが、もう少し側に寄るくらいなら問題がないかもしれない。

もっと近くに。

カイトが、身体をよじるように近づけようとした時。

「ん……」

もぞっと、メイが動いた。

そのはずみで、布団からこぼれ出る素肌の肩。

白い、というのがはっきり分かるくらいに明るかった。

窓にはカーテンがしてあるので、正確な時間は分からないが。

カイトは、布団をかけなおしてやろうと片腕を出した。

「んー…」

すると、まるで彼女は子犬のような仕草で温かさを求めるように、カイトにすりついてきたのだ。

普通よりもちょっと高い睡眠中の体温が、カイトに触れる。柔ら

かい素肌の感触。

昨夜も一度見せた、その安心しきった愛しい行動に、本当に彼女を起こすほど強く抱きしめそうだった。

そっと腕を回す。

ここでこらえる。

けれども、その行動にメイは反応さえしない。

まだ、深く眠っているようだ。

こんな寝顔が見られるのは、本当に嬉しかった。

いつもメイの方が、起床は早いため、それを全然知らないのだ。

ということは、彼女に寝顔を見られているのだろう。

どんなマヌケ面で寝ているのかと考えると、余り面白いことではなかった。

メイも、もう少し寝坊をしていいのだ。

そして、カイトにこんな気持ちを、味わわせて欲しいのである。

そんな時。

階下で。

車の音がした。

ん？

カイトが眉を顰めた瞬間。

ぱちっ。

腕の中のメイが目を覚ました。

「え…？」

一瞬、何もかも分からなくなったかのような茶色の目が、カイトを映す。

起き抜けによくある現象だ。

その瞳が、ぱっと違う方を向いた。

枕元だ。

カイトも、つられてそっちの方に頭を動かそうとした。

が。

「きゃー！！！！！！！！！！」

腕の中のメイが、大きな悲鳴を上げたのだ。

カイトはびくっとして、枕元を見た。

時計だった。

８時１０分。

シュウが――　出かける時間だ。

ということは、さっきの車の音は、階下の男である。

そして、彼らはまだベッドの中にいた。

そう。

見事な寝坊だったのだ。

「ど、どうしよう…ええ、えっと、朝ご飯！」

メイは起き上がるなり、ベッドから飛び出そうとした。

「きゃー！！！！！！！！！！！！！」

しかし、また悲鳴になって戻るだけだった。

彼女は、まだ何も着ていない状態だったのだ。

「いい、寝てろ」

慌ててカイトは、彼女をぎゅっと布団の中に押し込むなり、1人でベッドから出た。

何も着ていないのは、彼も一緒だ。

暖房は効いているが、やはりこんな格好で長くいて平気なワケじゃない。

それに、早く用意を済ませないと、本当に遅刻だった。

あのシュウに、結婚してたるんだなどと言われないためにも、彼は遅刻するワケにはいかなかったのである。

着替えをとっ掴むと脱衣所に駆け込み、身支度を2分で済ませた。

おかげで洗面所は水浸しになったのだが、彼はそれに気づかずに、急いでシャツのボタンを止めながら部屋の方に戻ったのである。

メイは、起き上がっていた。

正確には、引っぱり出した毛布にくるまったまま、身体を起こしているだけだ。

心配そうな目で、出てきたカイトを見ている。

寝坊して朝食も間に合わず、カイトまでも遅刻させそうになったことを、きっといまごろ後悔しているのだ。

んな、ツラすんな！

大股で、そんなメイの方に戻りながら、カイトは言葉を考えていた。

「遅刻は、しねぇ」

けれども、出てきたのはそんな味気ない言葉。

これくらいで、メイを安心させられるとは思わず、彼は余計に顔を顰めてしまった。

慌ててその表情を消すように、彼女の目の前に立つ。

それからベッドに片膝をついて身をかがめた。

そうすると、ベッドの上に座っているメイとは、そんなに身長差を感じなくなる。

この時間のない時に、何故わざわざベッドまで戻ってきたか。

それは、メイにしてもらわなければならないことがあったからだ。

朝食の時間はなくても、これだけはカイトだって失いたくない時間。

「あ…」

メイも、何を待っているのか分かったのだろう。

毛布の隙間から、白い腕を出してきた。

「きゃっ」

両手を出そうとしたものだから、毛布が落ちそうになって、メイは慌てて押さえる。

今度は、脇で毛布を押さえるようにしながら、両手を出してきた。

そう。

ネクタイは、まだ蛇のまま、ぶらんと首にぶら下がっていたのだから。

きゅっ。

彼女の指先が喉元まで上がってきて、ネクタイはきちんと所定の位置に納まった。

「はい……気をつけて…今日は、ごめんな…」

メイが、いろいろ言おうとしている。

しかも、また謝ろうとしている。

カイトは、ぱっと彼女の方をきちんと向き直ると、強く唇を重ねた。

聞きたくない言葉を飲み込むためだ。

「行ってくる」

唇を離すなり、身を翻してカイトは部屋を出ていった。

あんまり早く出過ぎて――　行ってらっしゃいさえ聞くことが出来なくて、カイトはすごく損をした気分を味あわされたのだった。

01／12 Wed. ―2

●

失敗しちゃった…。

結婚翌日――　もう、一体どれが初夜でそうでないんだか、分からなくなってしまっているが、正式な法律上の翌日――　メイは、見事に寝坊してしまった。

そして、ベッドからカイトを、見送ることになってしまったのである。

会社に遅刻しなければいいのだが、遅刻すまいと急いで事故なんかにあっては大変だ。

何事もないように願いながら、彼女は毛布にくるまったままベッドから降りた。

昨日は、結局カイトにベッドまで連れてこられてしまったので、何の着替えもベッドの側にはなかったのである。

せっかくだから、このままもう一度、シャワーを浴びようと思ったのだ。

脱衣所で毛布を落とそうとしたら、洗面所の下が濡れているのに気づいた。

カイトが、慌てて顔を洗っていったせいだろう。

メイは、その後始末を最初にした。

クスッと、ちょっと笑いながら。

生活する、という点については、彼にはいくつも欠点があった。

そういうものが見えると、何となく嬉しいのと親近感がわくのと、可愛いとさえ思える。

結婚した今、親近感がわく、などという表現を使うのは、すごく変な感じがするのだが、それ以外にぴったりくる言葉がないのだから仕方がない。

お互いのことを空気のように思える日が、いつか来るのだろうか。

メイは、ぽつっと考えたけれども、まだ随分先のことのように思えた。

そうなっている2人の姿というのは、いまの彼女には想像できなかったのである。

床を拭いてしまった後、毛布をはらりと脱いだ。

途端、部屋よりも低い気温に身震いを覚える。

早く、温かいお湯で身体を流そうと、足を踏み出した時。

「きゃー!!!!!!!!!」

メイは――　また悲鳴を上げてしまった。

今日3度目の悲鳴である。

1番目は、寝坊したこと。

2番目は、全裸でベッドから出ようとした自分に気づいたこと。

そして、3番目は。

自分の身体中に。

たくさんの赤い跡が見えたこと。

何気なく、洗面所の鏡を見たのがいけなかった。

そこに自分の上半身が映っていたのは分かった。

何も着ていないのも知っているし、ずっと付き合ってきた身体なのだから、大体のことは分かっているつもりだった。

しかし、首筋、鎖骨、胸、腕。

跡が残っているところは全て、カイトの唇が触れて強く吸った、という証拠なのだ。

「あ……あ…」

その光景が、想像とはいえビジュアルで頭の中に甦ったのだから、

物凄い騒ぎになってしまった。

メイは、鏡から逃げるようにお風呂場に駆け込むと、シャワーのお湯を出した。

強く身体を洗うのだが、勿論、石鹸ごときではその跡は消えないのだ。

そう言えば。

昨日一緒にお風呂に入った時に、カイトは言ったではないか。

『それだったら……洗っても消えねぇ』と。

確かに、メイは彼のしるしが欲しかった。

カイトがいない間も寂しくなくてすむように――　そう願ったからだ。

しかし。

多すぎだ。

これでは、襟ぐりの開いた服は着られない。

今が冬で本当によかった。

メイは、喜ぶべきなのか困るべきなのか、すごく複雑な気持ちのままで、身体を洗い流したのだ。

あのカイトが、いっぱい自分を好きだと言ってくれた証のようで、それは恥ずかしくて嬉しかった。

よそのカップルも、みんなあんな風なのだろうかと、しばらく洗い場で考え込んでしまった。

ハルコとかソウマとかも――　思いかけて、メイは頭がシュゥと音を立てたのが分かった。

自分が、何て失礼でハレンチな想像をしようとしていたかに気づいたのだ。

慌てて身体を洗い終わるとシャワーを止めて、脱衣所に戻る。

タートルネックのシャツを着て、作業のできるジーンズに着替えた。

バカなことを考えているヒマはなかった。

寝坊した分を、一生懸命の家事で取り返さなければならないのだ。

朝ご飯の分は、夕ご飯でカバーしようと思った。

おいしい夕ご飯を用意して、カイトに『うめぇ』を言ってもらいたかったのだ。

※

「あら、元気そうね」

車の音がしたから、まさか、と思ったら。

ハルコが現れたのだ。

午後3時1分前だった。

「ハルコさん…」

久しぶりに会ったような気がして、メイはちょっと驚いた声になってしまった。

本当は月曜日に会っているのだから、わずか2日ばかりなのだが――　間に、いろんなことがサンドされてしまったために、随分長く感じられた。

「あの、その節は…」

月曜日のドタバタを思い出して恥ずかしくなり、妙にかしこまって挨拶をしようとすると、ハルコがクスッと笑った。

「いきなり改まらなくてもいいのよ。はい、これおみやげ」

どう見ても、ケーキが入っているとしか思えない白い箱を差し出される。

いつもこうやって、彼女にいただきものばかりをしているような気がした。

「ありがとうございます」

本当に借りを作ってばかりである。

いつか恩返しが出来ればいいのに、とメイは思ったのだが、何でも一人で出来そうなハルコの手伝いを、自分がきちんとこなせそうにはなかった。

うーん、頑張らなくっちゃ。

心の中で、自分に苦笑いを浮かべる。

「それじゃあ、お茶でもいれますね」

とりあえずは、出来ることからだ。

お茶くらいなら、メイにも振る舞える。

ダイニングの方に案内しようとすると、ハルコがちょっと考えるような素振りをした後。

「まあ…ケーキ一つくらいなら大丈夫よねぇ」

彼女も苦笑いだった。

そう。

ハルコは妊婦で、お医者さんに体重制限をされているようだった。

妊娠も大変である。

あ。

しかし、それは他人事ではなくなるかもしれないのだ。

メイは、自分の考えに赤くなった。

カイトのあの様子からすれば、そうなる日が遠くなくてもおかしくないのだ。

彼女は、急ぎ足でハルコの先を歩きながら顔を隠した。

見つかってしまうと、きっとどうしてか聞かれてしまう。

しかし、答えられないようなコトを考えてしまったのだから、聞かれるのは困る。

だから、慌てて逃げたメイは正解だった。

無事、ごまかせたのだ。

※

ダイニングの席で、おいしいおやつを味わう。

お茶とケーキと女2人というパターンがあれば、次に来るのは『おしゃべり』と相場が決まっていた。

にこやかなハルコは。

「それで…カイト君の様子はどう？」

どう――　と聞かれても。

ハルコの質問の枠が大きすぎて、メイはどう答えていいか分からなかった。

「結婚してから、何か変わったかしら？」

彼女が質問に困っていると分かったのだろう。具体的な内容に切り替わった。

ああ、それなら。

メイは、変わった部分を思い出そうとした。

が。

きゃー！！！！

彼女は心の中で悲鳴をあげた。今日は悲鳴だらけだ。

どれもこれも、思い出すもの全部が、ハルコに答えられないようなものばかりだったのである。

走馬燈のように。とんでもない記憶ばかりが頭の中を駆け抜けて、全身が火を吹いた。

「え、あの…その……」

言葉も思い切りどもってしまって。

これでは、ハルコに誤解してくれというようなものである。

しかも、いまは彼女の目の前でお茶というシチュエーションなのだから、自分の顔の赤さや表情を隠す、なんてことは不可能だった。

「あら…幸せそうね」

おかげで。

にっこり微笑みながら、そんなことを言われてしまった。

ああ。

恥ずかしさに、穴があったら入りたかった。

このままでは、もっと恥ずかしい質問が繰り出されるのではないかと、メイがオロオロし始めた時。

来客を告げるチャイムが鳴った。

「あら、お客様？」

ハルコが彼女の表情を伺う。

そんな予定はなかった。

メイは、立ち上がって玄関まで向かう。

結果的に、ハルコの視線から逃げられたので、ちょっとほっとした。

「どちらさまですか？」

ドアごしに聞く。

「〇×ガスです！　ガス工事に来ました」

ガス工事？？？？？？

予想外のお客に、メイは面食らってしまった。

01／12 Wed. ―3

◎

あら、まぁ。

メイを見た瞬間、ハルコはそんな風に呟いた。

表面上は普通の顔をしていたが、本当はかなり驚いていたのだ。

きらきらきらきら。

何というか、彼女は『幸せ』という金粉でまぶされていて、一目で分かるほど輝いていたのだ。

内側からあふれ出す気持ちを押さえきれないように、笑顔も仕草も、月曜日からすると何もかもが違っていた。

肌のツヤさえ、違うように思える。

本当に、ぴかぴかしていた。

これは…。

内心で、ハルコは笑みをこぼしてしまう。

幸せに違いなかった。わずか2日間の結婚期間が、こんなにまで彼女を変えてしまっているのだから。

女を、これほど変える力が彼にあったなんて、信じにくいことで

あるが、こうして現物が目の前にあるのだ。疑うワケにはいかない。

まだ見ていないが、カイトもどれほど変わったか――　ひどく楽しみになってしまう瞬間だ。

こんなに素直に、表に出るメイほどではないだろうが、彼もきっと男っぷりを上げたに違いなかった。

いま仕事をしている夫に、すごくいい報告が出来そうだと分かって、ハルコはにこにこしてしまう。

お茶もケーキもおいしくて、彼女の笑顔は上塗りされていくだけだった。

しかし、きっとソウマは、その報告だけでは喜ばないだろう。

実は。

今日、ハルコがここを訪問すると言った時、一瞬眉を顰めたのだ。

要するに。

ズルい、と言いたいらしい。

ソウマも、この家を訪問したくてしょうがないのだが、仕事があるし。

さすがに、新婚家庭の夜に押し掛けるワケにはいかないと、多少は遠慮しているらしいのだ。

それなのに、いくらカイトのいない昼間とは言え、ハルコだけが訪問するというのは不公平だと思ったのだろう。

『ちゃんと、おみやげはもらってくるから』

そうやって、なだめて抜け駆けしてきたのである。

この場合のおみやげとは、『みやげ話』の方だった。

どんなものよりも、それをソウマが喜ぶのは知っていたのだ。

カイトと彼女がうまくいくことを、彼らは誰よりも心配していたのである。

だから、その後の幸せな話を、聞く権利はあったし――　何より、聞きたかった。

あのカイトが。

メイが絡むと、カイトのことを言う時に必ずそんな単語が頭につく。

あのカイトが、信じられないことを数々やらかすのである。いつまでも、彼女のネタであればからかうことが出来るのだ。

それはもう、楽しくて嬉しいのだが、何より信じられない出来事でもあった。

こんな日が訪れるなんて。

好きな女一人で、ここまで彼が変わったのだ。すごい影響力である。

しかし、本人はまったくそんな自覚もなさそうな笑顔で、おいしそうにケーキを食べている。

過去のカイトを知らないのだから、本当に自覚していないのかもしれなかった。

「それで…カイト君の様子はどう？」

しかし、メイしか知らない彼の顔もたくさんあるはずだった。

きっとソウマ夫婦の前よりも、かなりのウカツと持て余す気持ちを山積みにしているに違いない。

それのお裾分けをもらおうと思ったのだ。

その問いに、彼女はフォークを持ったまま困った顔になった。

どうやら、質問が広すぎたようである。

ハルコの方としても、『元気ですよ』などという返事が聞きたいワケではないのだ。

「結婚してから、何か変わったかしら？」

これなら、理解出来るだろう。

こんなにも、カイトは彼女を輝かせてしまったのだ。

2日の間に、一体どういう風な気持ちと態度をぶつけたら、こうなってしまうのか――　興味は尽きなかった。

「え、あの…その……」

一瞬面食らった顔が、かぁっと真っ赤になった。

多分、かなりいろんなことを思い出してしまったのだろう。

一体何を！

ハルコは、もう本当に吹き出すのをこらえるのが大変だった。

彼女が、あまりに素直だったこともだが、赤面して言葉を失うしかないようなことを、あのカイトがいろいろしたのかと思うと、おかしくてたまらなかったのだ。

しかし、ぐっとこらえる。

でないと、メイが警戒して、だんまりになってしまうかもしれないのだ。

「あら…幸せそうね」

さりげなく、当たり障りのない決着をつけてやりながらも――

しかし、にっこりは深々と彼女の唇からこぼれてしまった。

こらえきれなかった破片だ。

お茶もケーキもまだある。

時間は、まだたくさんあるのだ。

ゆっくり話を聞いても大丈夫なはずだった。

なのに来客を告げるチャイムが、彼女の邪魔をした。

首をひねりながらメイが玄関に出ていく。

セールスかしら？

そう思いかけたハルコは、『もしかしてソウマが来たんじゃ！』という疑惑が一瞬よぎり、そうして拭いきれなかった。

我慢できなかったのかしら、と思っていると。

それは、すぐに濡れ衣であることが分かった。

ツナギに工具箱を持った男の二人組を連れて、戸惑った顔のメイが帰ってきたからである。

青いツナギには『〇×ガス』と書いてあった。

「あら？　ガスの点検？」

ハルコは、夫の登場でなかったの拍子抜けしながらそう聞いた。

しかし、メイが困惑した顔をしている。

「いえ、違います。ガス給湯器の工事です」

青いツナギの片方。

年輩の方がよどみない口調で答えると、奥の調理場の方に入って行った。

給湯器の工事？

ハルコは怪訝な目のまま、メイを見る。彼女も首を傾げている。

確かに、この家の調理場には給湯器がない。

今まで男所帯だったため、彼らがその場所を使うことなど、ほとんどなかっただろう。

ハルコが、家政婦としてやってきている時は、確かにそこはいろいろ使っていた。

一度、給湯設備を入れませんか、とカイトに聞いた時には、すげなく『必要ねぇ』で蹴られてしまい、彼女は冷たい思いをしたのだ。

それなのに、なぜ今更給湯器が。

「あの…やっぱり何かの間違いじゃぁ」

不安そうに、メイは工事の人に声をかける。

彼女の預かり知らないことであるのは、その様子から明白だった。

「えー？　間違いじゃないですよ。今朝、緊急の工事依頼が入ったんですから…ねぇ、おやっさん？」

若い方が、どうしてそこまで食い下がられるか不満のようで、もう一人の先輩を呼ぶために声をかけた。

「あぁ…今日朝イチで電話が入って…えらく急ぎで、どうしても今日中につけろ、と…心配なら、確認しましょうか？」

手元の伝票を見ながらしゃべる男は、最後には不安な口調になった。

まさか、イタズラとかではないだろうかとでも思ったのだろう。

メイが反応するより。

「ええ、それなら工事をお願いします」

笑顔を止めきれなくなったハルコが、工事許可を出した。

誰がどういう理由でそんなことをしたのか、彼女にはもうおかしいくらいに分かってしまったのだ。

カイトだ。

もう、絶対に間違いなかった。

無理矢理、ガス工事をねじこむような男は、彼くらいしかいなかった。

メイは、意味がよく分からないのか、泳ぐような落ち着かない目でハルコを見るのだ。

ほんとにもう。

彼女が絡めば、カイトはどんなことでもやるのではないだろうかと思ってしまった。

それくらい大きな出来事だったのだ。

なのにメイときたら、事態を把握できないでいる。

ここまでカイトに愛される人間がいたのだ。

同じ女として、少し妬けてしまう。

そうして、ちょっとの悔しさとたくさんの笑顔を混ぜながら言ったのだ。

「私の時は…つけてくれなかったのよ」

本日最高の、『おみやげ』のテイクアウトが決まった。

01／12 Wed. ―4

□

「おかえりなさい！」

声のトーンが、2音くらい違った。

ドアを開けるなり、本当に飛び込んできそうな勢いの声に、不意打ちをくらったカイトは盛大に固まってしまった。

帰宅するまでは、昨日と同じように『本当にあいつがいるのか？』という病気にかかっていたのだが、そんなウィルスも何もかも、この一瞬で吹っ飛んでしまう。

出迎えのメイを見ると、もう身体中から押さえきれないような笑顔で、にこにこと笑っている。

身体中から、『嬉しい！　うれしい！』というオーラがびしばしに飛んでくるのだ。

何故、彼女がこんなにご機嫌なのか――　それについて、考えようとしたのだが。

「来て、来て！」

カイトの腕を捕まえて、子供のようにどこかへ連れて行こうとする。そんな彼女に、まばたきをしながらもついて行った。

一体、何があったんだ？

そう思っている内に、彼はダイニングに到着したのだった。

おいしそうな料理が、既にテーブルの上に用意されているのが見えたが、それは素通りだ。

彼女は料理に見向きもせずに、調理場まで連れて行くのである。

「ほら！」

中に入るなり、興奮さめやらぬ声をあげてカイトの注意を引く。

指をさされた先には。

流しの所には。

給湯器がついていたのだ。

あぁ。

それで、カイトは理解した。

今日の朝、カイトが一番最初にケイタイをかけた相手は――　ガス会社だったのだ。

冷たい水で後かたづけをさせたくなくて、また自分が忘れたりしない内に、と思った彼は、強引に今日中の工事をねじ込んだのである。

「ね、ね…見ててね」

メイは、ぱっとカイトから離れて袖口をまくると、給湯器のスイッチをポン、と押す。

すると、出てきた水がみるみるお湯に変わったのが分かった。

出てくる湯気のおかげだ。

それに、ばしゃばしゃと手をつけながら。

「これなら、お皿１００枚、２００枚洗っても平気…嬉しい」

はしゃぐような声で、彼女はそう言った。

そうじゃねぇ！

カイトは、ぐらっとした。

彼女を働かせるために、給湯器を入れたワケではないのだ。

そうではなくて、どうしても洗い物をしないと気が済まないメイに、せめて冷たい思いをさせないで済むようにという気持ちからなのだ。

『給湯器を入れたから、その分バカバカ働け』と、言っているワケではない。

そんなカイトの気持ちなど知らずに。

「ほら、あったかいから…触って」

子供のようにカイトの腕を引っ張って、指先が湯に触れるようにされる。

彼の反応など、見えていないかのようなはしゃぎっぷりだ。

たかが給湯器くらいで。

こんなにも喜ぶのだ。

カイトは、お湯の方ではなくて彼女の方を見ていた。

もっと早くつけてやればよかったし、そんなに欲しかったならねだればよかったのだ。

けれども、いまのメイがあんまりに嬉しそうなので、それに水を差すようなことは言えなかった。

ただ、カイトも強い充実感があった。

自分の甲斐性で、こんなに彼女を幸せに出来たのである。

やっと、メイのために、自分の懐が役に立ったのだ。

しかし、その内容が給湯器と言う、現実味溢れるものであるのだけが不満だった。

綺麗な服とかバッグとか靴とか。

詳しくはよく分からないが、そういう贅沢品の方が、普通の女は

喜ぶものじゃないだろうか。

カイトは、複雑な気持ちを抑えきれなかった。

「ね、あったかいでしょ？」

ぱっと振り返った彼女の笑顔は、まるで――　太陽のようだった。

こっぱずかしい表現かもしれないが、本当にカイトはそう思ったのだ。

いまが冬だということを忘れさせるような、ちょっと暑い初夏のような笑顔である。

欠けることなく、明るく高い温度を持っている球体。

反射的に、カイトはそれに目を細めてしまう。

「あぁ…」

目を彼女に奪われたまま、それだけを口にした。

メイの目も細くなる。

給湯器のスイッチを切って、改めて振り返った瞳を細めて。

「ありがとう、すごく、すごーく嬉しかったの…本当にありがとう」

そんなお礼を言うのだ。

一瞬、カイトの胸に昔がよぎった。

助けてくれてありがとう。

そういう響きを持つものだ。

あの頃は、彼女に感謝なんかされたくなかった。

あんな上下関係を、溝を、壁を、はっきり見せつけられるような感謝なんて、本当に大嫌いだったのだ。

そうか。

カイトは思った。

こんな感謝もあるのか、と。

嬉しくてしょうがなくてあふれ出た感謝の声と、昔の言葉が――比較になるはずもなかった。

「礼なんていい…」

夫婦になったのだ。

短絡的に言えば、もう何もかも2人の持ち物なのである。

家も金も、お互いの存在さえも。

だから、たとえ声音や言葉が昔と違ったとしても、お礼なんて必要なかった。

「ううん！　すごく嬉しかった、すごくありがとう！」

興奮していたのか。

彼女は、妙な言葉になった。

『すごくありがとう』

妙だが、メイらしい言葉のように思える。

それで、カイトはクッと笑ってしまった。

彼女が、もう少し自分の側に、近付いたような気がしたのだ。

お互い知らないことだらけで、一生懸命相手のことを探って失敗して。

少しずつ、メイが自分に近付いてくるように思えた。

一時は、世界の裏側まで離れているように思えたのに。

不意にこぼれたカイトの笑顔に。

メイが、ビクンッと震えて硬直した。

視線は、彼に向けたまま。

そんなに自分が変な表情をしていたのかと思って、カイトは慌てていつもの顔に戻った。

すると――　みるみる間に、残念そうな表情になるのだ。

一体、何だってんだ??

彼女のこの態度の変化の意味が分からずに、カイトは困惑してしまう。

「あの……一つお願いをしていい?」

残念そうな表情が、今度はいいコトでも思いついたのか、少し明るくなる。

そして、彼女の口から信じられない言葉が出てきた。

お願い。

お願いしていい?

カイトは、心の中にぱっと花が咲いたように思えた。

メイの口から、彼にお願いとやらが来たのだ。

その言葉で、こんなに自分が昂揚するとは思ってもみなかった。

もう、何でも欲しいものを言え、というところだ。

昂揚の余り、すぐに答えられないでいたが、その表情からＯＫだと理解したのだろうか。

メイは、続きを言おうとした。

「あの、ね…あの……もう一回…笑って」

ドンガラガッシャーン！

心の中で、山積みの灯油缶の中にバイクを突っ込ませてしまった。

何を言い出すかと思えば。

笑顔！

しかも、カイトの、だ。

そんなものを彼女は、お願いしてきたのである。

彼の甲斐性とは、まったくもって違うカナタにあるものを。

笑顔なんて、誰でも出すことが出来て、１円もかからないスマイルというものなのだ。

そんな、どこにでもはいて捨てるようなものを、どうしてわざわざお願いなんて。

は。

己を振り返れば、そんなことを言えるハズもなかった。

これまで、何度彼女の前で笑顔を見せたというのか。

思い出しても、一番最初の出会いの『水割り爆笑事件』辺り以外では、まったくなかったような気がした。

ということは、自分はいつもメイの前で仏頂面だったり、怒鳴ったりと、そんな表情しかしていなかったのである。

そんな男と、よくも結婚してくれる気になったものだ。

それじゃあ、ここで笑顔を一つ。

しかし。

そんな器用なことが出来る男なら、もっとうまく彼女と幸せを掴めていたハズだ。

カイトは、イヤな汗をだらだらとかいた。

メイが望むのなら、笑顔の一つや二つをプレゼントしたかった。

しかし、かしこまって出せと言われても出るものではないのだ。

特に彼の笑顔とやらは。

その上、期待に満ちた目が自分を見ている。

期待に応えられるような笑顔を、自分は出せるのか。

メイの、あの太陽のような笑顔を見た後で、だ。

頭の中を、ぐるぐると、『期待と失望』、『甲斐性と人間性』、『プライドと愛』などという言葉が巡っていく。

熱が出て倒れそうなくらい、頭の中は大変な騒ぎだった。

「ダメ？」

見上げてくる、お願いの目。

絶体――　絶命のピンチだった。

――終――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6252u/

冬うらら1.5

2011年7月5日19時57分発行